

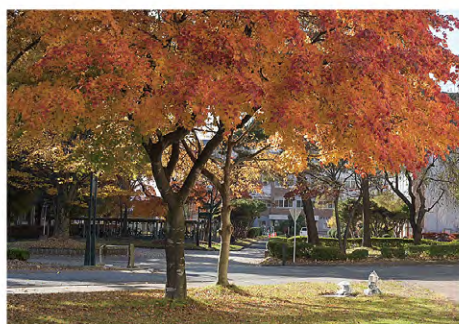
岩手大学から世界に繋ぐ環境保全

環境報告書

2026



国立大学法人
岩手大学
IWATE UNIVERSITY



◇ 表紙について

表紙は、キャンパスを彩る四季折々の風景と、私たちの学びのフィールドである岩手の豊かな自然を写真で構成し、岩手大学の「ありのままの今」を伝えています。

メイン写真には、残雪の岩手山を背景に桜が咲き誇るキャンパスを据えました。その下には、私たちが育てているグリーンカーテンの瑞々しい緑や、季節ごとに表情を変える樹木、生命の息吹を感じさせる花々を配置しています。

これらの写真は、私たち環境マネジメント学生委員会（EMSC）の日常の活動と密接に結びついています。一連の風景にグリーンカーテンを織り交ぜることで、日々の活動を通じて季節の変化を感じられることを表現しています。また、自治体や企業を訪れ、直接お話をうかがう環境視察研修の精神に基づき、加工のないありのままの風景を切り取ることで、私たちのモットーである「実際に見て、触れて、学ぶ」姿勢を示しています。

震災から15年が経過し、社会情勢や環境課題のあり方も変化し続けています。だからこそ私たちは、自ら体験して学ぶという「実感を伴う活動」を何よりも大切にしています。この表紙に溢れる豊かな色彩のように、多様な視点を持ちながら、自然と人間活動が調和する持続可能な社会の実現に向けて、これからも一歩ずつ歩みを進めてまいります。

岩手大学環境マネジメント学生委員会 高山姫瑠、新沼遼佳



◇ 対象組織

岩手大学上田キャンパス（人文社会科学部・教育学部・理工学部・農学部・獣医学部）、加賀野キャンパス（附属幼稚園・附属小学校・附属中学校）、東安庭キャンパス（附属特別支援学校）、御明神演習林、御明神牧場、滝沢農場、滝沢演習林、釜石キャンパス。また、本学と異なる組織体ですが、環境マネジメントシステムの適用範囲（上田キャンパス）に放送大学岩手大学学習センター及び岩手大学生生活協同組合も含まれます。

◇ 対象期間

2025年4月1日～2026年3月31日

◇ 報告対象分野

環境的側面及び社会的側面

◇ 環境報告等に関する基準又はガイドライン等

この報告書は、「環境情報の提供の促進等による特定事業者等の環境に配慮した事業活動の促進に関する法律」に準拠し、環境省の「[環境報告ガイドライン2018年版](#)」を参考にしています。

持続可能な開発目標（SDGs）とは、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030のアジェンダ」にて掲載された2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さない（leave no one behind）ことを誓っています。（出典：[外務省HP](#)）

本報告書でもそれぞれの内容に合わせて、SDGsのラベリングを行っています。



目 次

contents

学長メッセージ	1
---------	---

1. 2025年度環境教育・研究と学生などの環境活動トピックス

「サステナブルキャンパス賞2025」奨励賞 受賞	2
第18回HESDフォーラムに参加	3
2025年度環境セミナー開催	4

2. 環境教育・研究

学部・研究科の環境教育	5
学部・学科の環境研究	6
環境科目責任教員インタビュー	7
環境研究紹介インタビュー	8
附属学校の環境教育活動（附属幼稚園）	9
附属学校の環境教育活動（附属小学校）	10

3. 学生の環境活動

環境マネジメント学生委員会の取組	11
学生サークルの環境活動	14
『学内カンパニー』活動と環境活動カンパニー紹介	15
環境関連分野に取り組む卒業生の活躍紹介	16

4. 構内事業者の取組

岩手大学生生活協同組合の環境への取組	17
--------------------	----

5. 地域における環境コミュニケーション

環境関連の外部委員会などへの参画	18
環境問題に関する研究会など	
地域課題解決プログラム	19

6. 環境方針

岩手大学環境方針	20
岩手大学ビジョン2030	

7. 岩手大学の概要

運営組織・教育研究組織	
-------------	--

8. 岩手大学の環境マネジメント

環境マネジメントシステム運営組織	21
環境配慮の取組に関する目標及び計画の達成状況	

9. 環境負荷低減への取組

総エネルギー投入量	24
水資源投入量	25
総物質投入量	
温室効果ガス等の排出量	
化学物質排出量及び管理状況	26
廃棄物等総排出量	
総排水量	27
グリーン購入の状況	
有害物質等の漏出	28
生物多様性の保全	
学外事業者への環境配慮依頼	29
資源の投入及び外部への排出状況	30
環境会計に関する情報	31
環境保全効果・環境保全対策に伴う経済効果	32

10. 環境に関する規制などの遵守状況及び環境リスクマネジメント

岩手大学に関わる環境法規制（一部）	33
環境リスクマネジメント	
毒物・劇物の管理	34

11. 環境マネジメントシステムの見直し

代表者による全体の評価と見直し	35
-----------------	----

12. 環境報告書第三者意見

ステークホルダーによる環境報告書の評価	37
『環境報告書2025』第三者意見への対応	38
サステナビリティ・レポート・アワード(SRA) 審査講評	39

13. 本年度活動計画

2026年度岩手大学環境目標及び活動計画	40
----------------------	----

環境報告ガイドライン項目と本報告書対象項目	42
-----------------------	----

編集後記



国立大学法人 岩手大学長

山本 欣郎

岩手大学は、2006年（平成18年）1月に「岩手大学環境方針」を制定して以来、20年にわたり環境問題に取り組んできました。2010年（平成22年）11月には、組織の活動における環境影響を継続的に管理・改善するための国際規格であるISO14001の認証を取得しました。その後、ISO14001から環境省が策定したエコアクション21へ移行し、2017年（平成29年）12月に認証を取得しました。現在は、これまでに培った経験と知見を生かし、岩手大学独自の環境マネジメントを推進しています。

岩手大学の環境マネジメントは、毎年度策定する活動計画に基づいて実施されています。その内容は、キャンパス環境の改善や二酸化炭素排出量の削減に向けた省エネルギーの推進など多岐にわたります。なかでも、環境教育・環境人材育成ならびに環境関連研究には特に力を注いでいます。

教養教育では「環境科目」を開講し、各学部の専門教育においても環境に関する多様な科目を設けています。また、卒業論文、修士論文、博士論文において環境に関するテーマに取り組む機会を提供するなど、さまざまな側面から環境教育を展開しています。さらに、附属幼稚園や附属小学校においても環境教育を実践しており、岩手大学では幼児期から大学まで一貫して環境について学ぶことができる教育を展開しています。

岩手大学の環境マネジメントにおける大きな特徴の一つが、学生の主体的な参画です。学長直轄の「環境マネジメント推進委員会」のもとに「環境マネジメント学生委員会」が設置されており、グリーンカーテンの設置、環境教育活動、廃棄物対策など、さまざまな取り組みを展開しています。こうした活動が評価され、2025年（令和7年）には、一般社団法人サステイナブルキャンパス推進協議会の年次大会において、学生活動部門奨励賞を受賞しました。学生の積極的な活動は、本学の環境保全活動を支える大きな原動力となっています。

現在の「岩手大学環境方針」では、SDGs（持続可能な開発目標）の理念を踏まえ、持続可能な社会の実現に貢献することを基本理念として掲げています。岩手大学は、これからも「誰一人取り残さない」という理念のもと、環境保全活動と環境教育を着実に推進し、持続可能な社会の実現とより良い教育環境の創出に貢献してまいります。今後とも皆様のご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

1. 2025年度環境教育・研究と学生などの環境活動トピックス

「サステナブルキャンパス賞2025」 奨励賞 受賞



2025年11月7日（金）・8日（土）、北海道大学札幌キャンパスで開催された「一般社団法人サステナブルキャンパス推進協議会（CAS-Net JAPAN）2025年次大会～サステナブルキャンパスがつなぐ知と実践～」に、岩手大学環境マネジメント推進室副室長1名と岩手大学環境マネジメント学生委員会（EMSC）所属学生2名が参加しました。

CAS-Net JAPANは、大学のキャンパスでハード面の環境配慮活動を更に促進するとともに、ソフト面の取組も同時に実施するサステナブルキャンパスの取組を推進し加速させ、諸外国の先進的なネットワークとも連携することで、日本で持続可能な環境配慮型社会の構築に貢献することを目的としています。岩手大学はCAS-Net JAPANの会員です。

2日目の11月8日午後には、事例発表分科会「学生活動部門」で、EMSC所属学生2名が、大学内外での環境活動の概要を紹介しました。

その後、CAS-Net JAPAN主催「サステナブルキャンパス賞2025」受賞者の発表があり、岩手大学は学生活動部門奨励賞を受賞しました。2016年度に「第2回サステナブルキャンパス賞」「学生活動・地域連携活動部門賞」を受賞して以来になりました。

審査講評では、まず、EMSCが18年間環境活動を継続している点を意義深く、称賛に値すると高く評価されました。そのうえで、企業・他大学・行政機関・NPO（特定非営利活動）法人などとのパートナーシップにより、多様な活動を展開しているとともに、地元メディアとの連携によって情報発信・公開を行っていることも高く評価されました。事例受賞講演として、EMSC所属学生2名が「サステナブルキャンパス賞」応募内容に即した発表を行いました。

[CAS-Net JAPAN 年次大会2025実施報告](#)

[サステナブルキャンパス賞2025 受賞者の発表](#)



「CAS-Net JAPAN 2025年次大会」の様子

第18回HESDフォーラムに参加



2026年3月14日、立教大学池袋キャンパス4号館で第18回HESDフォーラムが開催されました。同フォーラムには、環境マネジメント推進室副室長と環境マネジメント学生委員会所属学生2名が参加しました。

高等教育機関におけるESD（HESD）フォーラムは、2006～08年度に岩手大学も採択された文部科学省現代GP（Good Practice）プロジェクトでESD（持続発展教育）に取り組む大学が集まり、緩やかな情報交換のサーロンのネットワークを目指して設立されました。2007年に第1回フォーラムが岩手大学で開催されて以来、これまでに17回開催されてきました。

第18回HESDフォーラムでは、主催のHESDフォーラムの三好徳和会長と共催地・立教大学の小林潤司環境学部開設準備室長による開会挨拶後に、2つの会場に分かれて、大学教員及び学生等によるESD活動報告が対面とオンラインのハイブリッド形式で行われました。

岩手大学環境マネジメント学生委員会（EMSC）は、同委員会の目的・目標やチーム構成・活動など基本情報を参加者と共有した後に、岩手大学内外企業・行政機関・民間団体と連携、協働した環境分野の地域活動について紹介しました。例えば、株式会社岩手日報社・花王株式会社・株式会社電通との協働事業「いわてリサイクリエーションプロジェクト」、株式会社岩手朝日テレビや株式会社テレビ岩手、岩手県庁、特定非営利活動法人環境パートナーシップいわて、岩手県立大学・富士大学の学生団体による「いわてカーボンフリー・アクション」、株式会社岩手日報社・トヨタ自動車株式会社・株式会社寿広による「TOYOTA SOCIAL FES!!」の活動紹介などを発表しました。最後に、EMSCの今後の活動の課題と展望を発表しました。



2025年度環境セミナー開催



2025年6月2日、岩手大学環境マネジメント推進室主催の環境セミナーが開催されました。講師として北海道大学大学院教授の宮内泰介先生（環境社会学）をお招きし、「複雑さの中でどう環境保全を進めればよいのか」と題する講演とともに、講演を受けての参加者間のグループディスカッションをあわせての開催となりました。

講演の内容は大きく分けて三点からなり、第一に何が自然保護・環境保全なのかは最初から決まっていなと、第二に科学は常に不確実さを含み、社会は常に多面性を持っていることから単純に正解を導けないこと、第三に問題解決にむけての合意形成とは納得へ向けた多角的なプロセスの束であることが紹介されました。

第一に関して言えば、環境保全の名のもとに設置される国立公園化によって居住地から強制移住を強いられるアフリカにおける「自然保護難民」の存在などを例に、自然保護・環境保全は一つの「社会的な価値」にすぎず、何が自然保護・環境保全なのかは最初から決まっているわけではないとされました。

第二については、自然科学はチェスのように対象とするものの枠組みがはっきりしていて、その中で問題を解くことができるが、社会の問題はその枠組みがあらかじめはっきりしておらず、そのため明確な「答え」がないこと、だから問題に「解決」はなく、社会問題は決して「解決」されることなく、少なくとも何度も何度も再解決（re-solve）されつづけるとされました。

そして第三に関して、そうした問題に対しては、「科学的な解」や「絶対的な解」は存在せず、多様なステークホルダーが集まって合意形成した結果が解（社会的解）となるが、合意形成そのものが大変困難であることが同時に提示されました。

誰が話し合いに加わるべきなのか、話し合いで決めたことに対する異論をどう扱うか、話し合いのテーマは誰が決めるのか、合意形成は「話し合う」ことで済むのか、そもそも「合意」とは一体何を指すのかなど難問だらけです。だからこそ合意とはただ話し合うことではなく、多角的なコミュニケーションに基づく納得であり、合意形成とは、納得へ向けた多角的なプロセスの束なのであるとされました。

こうした講演を下敷きに、参加者によるクマ出没問題に関する活発なグループディスカッションと結果発表が行われ、セミナーは好評のもとに終了しました。

環境セミナーは今後も継続の予定です。



2. 環境教育・研究

学部・研究科の 環境教育



教養教育「環境科目」

環境A／環境B／環境C／環境D／環境E／環境F etc.

人文社会科学部

総合科学基礎（地域政策）A・B／環境政策論Ⅰ・Ⅱ／環境経済論A・B／
環境社会学Ⅰ・Ⅱ／環境生態学A・B／自然環境学A・B／環境統計学Ⅰ／
国際開発と環境・貧困／環境科学演習／環境科学実験／環境社会調査演習／
地域環境マネジメント実践演習／環境社会学特講／環境思想etc.

教育学部

人文地理学概論A／小学校社会／小学校理科／生物学A／理科教育法Ⅳ／地学実験Ⅰ・Ⅱ／
理科教育実験特講Ⅰ・Ⅱ／生物学実験Ⅰetc.

理工学部

ソフトパス理工学概論／入門地域創生論／環境工学／エコ材料学／燃焼工学／
大気環境工学／水環境工学／施工法／地盤環境工学／資源循環工学／生態環境保全学etc.

農学部

生物学／地学入門／農学概論／作物栽培学／植物生理学／応用昆虫学Ⅰ・Ⅱ／環境植物生理学／
植物栄養学・肥料学／土壌環境微生物学・生化学／公衆衛生学／食品加工物理化学／地域環境科学概論／
森林造成学／森林造成学実習／環境防災学／NPO・環境ガバナンス論／砂防学実習／
環境と樹木の生理／森林保護学／緑地環境学／環境修復学／
栽培施設学Ⅰ・Ⅱ／農業気象・環境学／食産業システム学演習／水産科学入門／水圏環境学／
ミクロ経済学入門／自然環境論／漁業資源生態学／草地学／動物資源利用学Ⅰ・Ⅱ／環境衛生学etc.

獣医学部

該当科目なし

総合科学研究科

研究科共通科目：

グローバル環境科学特論

地域創生専攻：

植物環境制御学特論／水産資源生態学特論／環境経済論特論／地域環境政策特論／地域環境社会学特論／水
資源・環境制度特論／社会基盤・環境工学特論／水環境工学特論／地盤環境工学特論
etc.

理工学専攻：

ソフトパス理工学特論／エネルギー材料理工学特論／環境センシング／地域デザイン／燃焼工学特論etc.

農学専攻：

作物栽培学特論／農業技術学特論／環境土壌学特論／動物資源利用学特論



教員の研究テーマ

人文社会科学部

- ・「冬を旨とした家」への転換一求められる「エコ住宅」普及施策と推進体制
- ・地方森林環境税に関わる制度の運営と財源調達の検証

教育学部

- ・資源植物の栽培環境に関する研究
- ・沖積平野の地形形成過程と人々の居住地域の関係
- ・教育現場で活用できる簡易水質分析法に関する研究
- ・沖積平野から沿岸域への土砂供給と海岸地形変化

理工学部

- ・水環境の保全と評価に関する研究
- ・土壌中の粘土鉱物へのセシウムの収着動態に関する研究
- ・大気汚染物質の簡易モニタリング法に関する研究
- ・ヒ素を含有する貯水池堆積物の処理手法の開発
- ・排水中抗菌性物質の除去処理法に関する研究
- ・肥料利用に向けた下水汚泥の無害化と有用元素類の回収
- ・廃棄物を利用した環境浄化材の開発

農学部

- ・微生物によるバイオプラスチック合成
- ・減圧マイクロ波による低環境負荷型乾燥法の確立：品質と環境負荷の最適化を目指して
- ・ゴム廃棄物からプラスチックへのダイレクトアップリサイクル技術の開発と高効率化
- ・森林ガバナンスに関する研究
- ・産業廃棄物を原料としたグリコール酸高分率コポリマー創製のための代謝工学戦略
- ・人工林におけるスギの成長と環境生理

獣医学部

- ・福島第一原発事故による環境の放射能汚染に関する研究
- ・水道水中の有機フッ素化合物（PFAS）の曝露制御に関する研究

学生の卒業論文・修士論文・博士論文の研究テーマ

人文社会科学部

- ・地熱発電普及への課題と展望－国内外の事例を通して－
- ・岩手山における登山道管理の実態と持続可能性
- ・地方における風力発電の影響と今後－青森・秋田を中心に－
- ・地球温暖化問題に配慮した交通手段の在り方に関する研究
- ・中山間地域における農林業改革モデルの提案－北東北を事例として－
- ・エシカル消費がもつ可能性－普及する上で重要な要因－
- ・地方自治体における公園管理の実態と課題－岩手県金ケ崎町を事例として
- ・持続可能な鉱物資源サプライチェーンの構築－コンゴ民主共和国の紛争と人道問題から－
- ・音を用いた環境教育の有効性

教育学部

- ・「いわての復興教育」の視点で捉え直す教科横断的な授業づくり
- ・岩手県軽米町における雑穀生産の拡大要因
- ・「ローカルな環境（地域の・身近な環境）」と「グローバルな環境」とを関連づけた環境教育について
- ・高分子材料の高感度な劣化評価手法の開発
- ・自然体験活動を行う小学校特別支援学級教員の授業構想のポイント
- ・ウミホタルルシフェラーゼ遺伝子の第6エキソンの次世代シーケンス解析
- ・中学校技術分野「生物育成」に関する研究
- ・デジタルカメラを用いた微量金属の高感度簡易分析法の開発
- ・幼稚園教育の栽培に関する研究
- ・北海道中央部・神居古潭変成帯への緑泥石温度計の適用
- ・岩手山ミュオグラフィのためのデータ解析のプログラム構築

理工学部

- ・余剰汚泥分離液からの肥料成分の回収に関する研究
- ・鉄（Ⅵ）酸塩と浄水汚泥を併用して不溶化したヒ素の再溶出性の評価
- ・画像解析による飛散粉じん量推定のための撮影条件の検証とドローンを用いたモニタリングへの展開
- ・GISを利用した砕石場内の植生樹木によるCO₂吸収量算定に関する検討
- ・シールド残渣を用いた過硫酸法によるトリクロロエチレンの分解
- ・外來生物の個体数管理に資するフェロモン様物質の合成研究
- ・下水処理水放流河川での抗菌剤の挙動

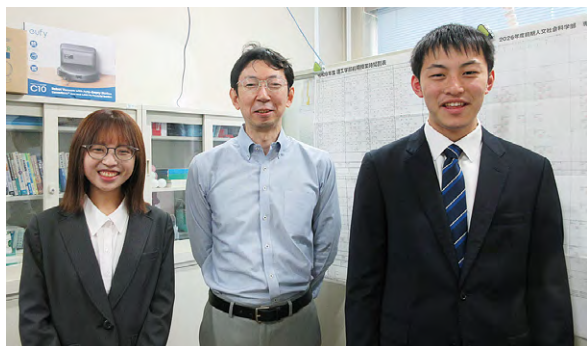
農学部

- ・針葉樹におけるRubiscoの存在量と生体内活性の季節変化
- ・アメリカミズアブによる地域廃棄物の水産養殖飼料資源化に向けた研究
- ・海洋環境におけるナイロン6/66共重合体分解菌の探索と分解酵素の諸性質解析
- ・廃棄プラスチックを原料とした微生物によるポリヒドロキシアルカン酸合成
- ・大船渡山林火災跡地の植生回復における初期更新過程での制約－種子散布と鳥類群集からの考察－
- ・海藻に含まれる炭素源によるCobetia sp. 5-11-6-3の遺伝子発現変動解析とバイオプラスチック生産性の増強
- ・冷温帯針広混交林における森林動態への気候変動の影響
- ・下水道由来の肥料資材の施用が植物の生育と土壌中のリン動態に及ぼす影響
- ・市町村における森林環境譲与税の使途の特徴と課題
- ・湧水（名水）の細菌汚染状況調査
- ・キャベツのライフサイクルにおける二酸化炭素排出量の評価
- ・河川水の大腸菌の薬剤耐性実態調査
- ・自治体における生ごみ堆肥化事業の実態分析－環境省「一般廃棄物処理実態調査結果」に基づく全国比較－

獣医学部

なし

環境科目責任教員インタビュー



人文社会科学部 地域政策課程

寺崎 正紀 先生



環境マネジメント学生委員会

新沼 遼佳 (人文社会科学部 3年)

千葉 快士 (教育学部 3年)



Q1

担当されている環境科目はどのようなものですか。

寺崎先生

7名の教員がそれぞれの専門分野から環境との関わりを講義するオムニバス形式の科目です。私が担当する「環境A」では、特に「社会と環境」をテーマに、経済、暮らし、廃棄物、法、政治、都市、さらには岩手県特有の農畜産業や森林と環境の関わりなど、1年生に向けて幅広い視点から講義を展開しています。

Q2

環境について学ぶ意義は何だと思われますか？

寺崎先生

環境問題は、あらゆる分野と密接に関係しています。そのため、環境を学ぶことは、結果として多面的なものの考え方を身につけることにつながります。

環境が悪化すれば、テクノロジーによる浄化や行政による対策が求められますし、気候が変われば食料資源や経済システムにも影響が及びます。身近なところからステップアップし、ものの見方を広げ、深めていく。そうすることで、普段の生活では気づけないつながりに気づくことができるようになります。

Q3

今、最も重要だと思う環境課題を教えてください。

寺崎先生

気候変動と化学物質が複雑に絡み合った問題に懸念を持っています。

例えば、温暖化対策として電気自動車やハイブリッド車が普及していますが、これらは車体がガソリン車と比べて重いので、走行時のタイヤの摩耗粉塵をより多く排出します。温暖化対策として良かれと思って進めてきたことが、別の面で環境負荷になっているのです。ヨーロッパでは既にタイヤ由来の排出物規制が始まっていますが、日本はまだこれからという段階です。こうした一つの解決策が別の問題を生む現象には注視が必要です。

だこれからという段階です。こうした一つの解決策が別の問題を生む現象には注視が必要です。

Q4

その課題に対し、どのような展望をお持ちですか？

寺崎先生

かつてのオゾン層保護（フロンガス規制）のように、世界が協力して成功したモデルを大切にしたいですね。

何より重要なのは、感情に流されず、根拠を持って冷静に考えることです。単純に「化学物質は悪だ」「自然はとにかく大事だ」と叫ぶだけでは社会はまともなりません。

例えば昨今のクマの問題もそうですが、リスクをゼロにすることは不可能です。社会としてどの程度のリスクなら許容できるのかという、リスク管理の視点を持ち、有害性と利便性のバランスを正しく判断できる知識を、皆が少しずつ身につけていくことが必要だと考えています。

Q5

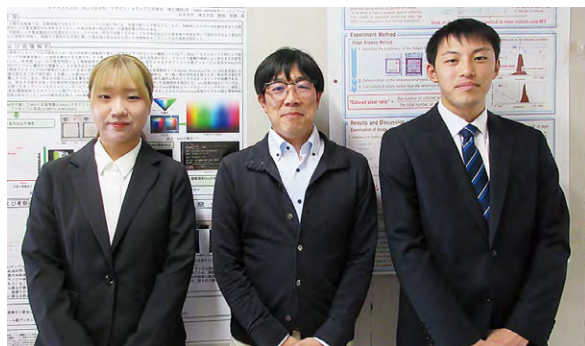
岩手大学の学生に向けてメッセージをお願いします。

寺崎先生

岩手大学の学生は元々、環境への意識が非常に高く、バランスを取りながら学ぶ姿勢があると感じています。

ぜひ、その意識をキープしてください。そして、皆さんが行っている環境活動や学びの姿勢を、次に入学してくる後輩たちへ伝えていく仕組みを続けてほしいと期待しています。





理工学部 理工学科 社会基盤・環境工学コース

齊藤 貢 先生

×

環境マネジメント学生委員会

千葉 快士 (教育学部 3年)

三上 絢香 (人文社会科学部 2年)



研究テーマ：「大気環境情報の見える化と環境情報発信に関する研究」

Q1

現在どのような研究を行っていますか。

齊藤先生

大気環境の情報を見える化しその情報を広く発信する研究を行っています。

主に二つの研究があり、一つ目は粉塵から汚染物質を簡単にモニタリングする方法です。碎石場や災害被災地での粉塵中には目に見えない汚染物質が含まれています。現在は主に碎石場で粉塵に含まれる鉄 (Fe) の量を画像解析を用いて簡便に測定する研究をしています。碎石場にオリジナルな粉塵モニタリングシートを設置し粉塵を吸着させ、Feと反応する液体を吹きかけることでどれぐらい粉塵中に鉄 (Fe) が含まれているかを調べています。

二つ目は、森林がどれぐらいCO₂吸収しているかを人工衛星データから算出する研究です。森はCO₂を吸収していますが、木の種類や樹齢によってCO₂の吸収量は異なります。人工衛星データの解析によってその地域の森林状態 (種類や樹齢) を把握したり、森林量の減少がどれだけのCO₂吸収能力を阻害するかを分析しています。

Q2

環境問題を考える上で重要だと思うことはなんですか

齊藤先生

まず環境問題に興味・関心をもっていただくことです。そして自分ごととして環境問題を捉えて欲しいです。

日本では大気汚染と言われても過去のものという意識で馴染みはないでしょう。しかし世界に目を向けると未だに大気汚染による死亡者は何百万人といえます。環境に興味がないと、それらのニュースは入ってきません。

環境問題に取り組むことは容易なことではありませんが、まず環境問題に興味・関心を持ってみることが重要だと思います。

Q3

研究の課題と展望を教えてください

齊藤先生

研究の課題は、サンプルデータがまだまだ不足している点です。例えば、粉塵中成分の簡易モニタリングにおいては、自然がフィールドであるため雨や風など気候条件によってもモニタリングデータは異なり、一様の傾向をつかむことが難しいです。気象などの条件が変わってもモニタリング結果が反映できるシステムとするためにはサンプルデータがたくさん必要です。

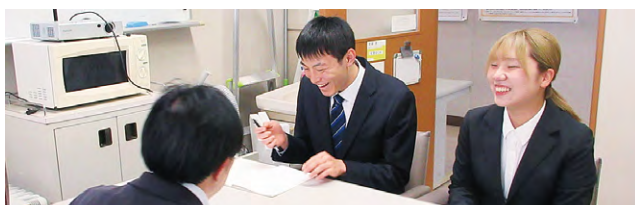
また、展望としては、粉塵中成分モニタリングでの画像撮影を人間ではなくドローンカメラで行うことで、広範囲エリアでのモニタリングに対応させたいと考えています。また、画像解析によるモニタリング方法を様々な汚染物質にも応用させて汚染物質の状況を一般市民の方々へ発信できたらと思います。

Q4

学生に環境問題に対してどのように向き合ってほしいですか

齊藤先生

2個目の質問と関連していますが、環境問題への関心がなければ向き合うこともできないでしょう。環境問題で気になること、引っかけたことは進んで本やインターネットなどで調べてみてください。皆さんにはAIも近くにありまじし、たくさんの情報をすぐに手に入れることができます。今すぐに環境問題に向き合うことはできなくても、頭のどこかに「環境」というキーワードが引っかけっていて、何かのきっかけですぐに検索できる状態でいて欲しいです。



附属学校の環境教育活動 (附属幼稚園)



附属幼稚園では、環境教育として、年齢の発達に応じ、花や野菜を植えたり世話をしたりする体験を通して植物に親しみをもち、生命の営みに気付いたり大切にしようとしたりする心を育てる活動に取り組みました。

●一人一鉢栽培

年長組は、一人一鉢ずつインパチェンスの苗を植えました。花育アドバイザーの佐藤さんに教えていただきながらポットを逆さまにして苗を取り出し、そっと自分の鉢に移すその手つきは、なかなかのものです。元気に育つように願いを込め、優しく土をかけました。みんなで植えた色とりどりのインパチェンスを眺めながら園庭で遊んだり、自分の植えたインパチェンスは元気に咲いているだろうかと水やりをしたり、近くに行ってみたり、花の様子の変化に気付いたりなど、花を身近に感じ大切に育てる気持ちを育む機会となりました。



●種団子作り・チューリップの球根植え

年中組は、秋に、花育アドバイザーの佐藤さんに教わりながら土を丸めた団子に様々な花の種をまぎした種団子を作りました。年長組になる春にはどんな花が咲くか楽しみにしながら種団子や球根を植え、園庭の花壇の冬支度をしました。



●野菜の栽培

年少組は牛乳パックを鉢にしてつるなしインゲンの栽培をしたり、プランターで栽培したイチゴを観察したり収穫したりしました。白い花が咲き、小さなイチゴの青い実が赤く色づいていく様子を、「大きくなあれ。あまーくなあれ。」と毎日楽しみに観察していた年少組の子どもたち。収穫した甘いイチゴをみんなで味わいました。



年中組は、プランターで二十日大根を栽培し、葉が大きくなっていく様子を観察しながらその生長を楽しみにしてきました。育った二十日大根を収穫し、「丸いね。」「赤いね。」「こっちの方が小さいね。」など、収穫の喜びや驚きを感じていた年中組。その後も観察を続け、種を取りました。

年長組は、中学校の畑を借りてジャガイモ、サツマイモを植えました。園長先生に植え方や世話の仕方を教えてもらい、水やりをしたり草取りをしたりなど、生長に期待しながら関わってきました。収穫したジャガイモはいも餅にして、サツマイモはじっくり観察して絵を描き、焼き芋にしてみんなでおいしくいただきました。



園の正門から玄関まで、子ども達が行き来するところには、花や野菜のプランターが並びます。ナスやピーマン、ミニトマトなど、それぞれの違いに興味をもちながら登降園する子ども達。「ばく、ピーマン食べられるよ。」「こっちのナスが大きいね。」など、野菜への関心や食への興味をもつとともに、収穫の喜びや感謝の気持ちが育まれる機会となりました。

環境学習の充実と発展

附属小学校では、「学びをたのしむ子供」の育成を目指し、教育課程全体を通して体験的に学ぶ活動を推進してきました。1・2年生では生活科を中心に、3年生から6年生では各教科の学習やわかたけタイム（総合的な学習の時間）の学習において、体験的な学びを取り入れながら、環境学習の充実と発展に取り組んでいます。さらに、委員会活動など児童の自治的活動においても、学校環境をよりよくしようとする取組を進めています。

●4年理科「季節と生き物」領域の実践より

本領域は、気温や日照時間などの環境変化に伴う「動物の活動」や「植物の成長」を季節と関係付けて観察し、自然の仕組みを理解することをねらいとしています。実際の学習では、植物や動物の成長や変化を継続的に観察しながら、身近な自然環境との関わりについて理解を深める学習に取り組みました。

児童は、「色・形・大きさ」といった視点から植物の変化を観察し、その変化に気付きながら、よりよい環境で成長できるように定期的に水やりや世話を行いました。また、植物や動物の成長や変化の様子を観察することを通して、日当たりや気温、水分などの環境条件が、生き物の育ちや活動に関係していることを実感を伴って理解することができました。

これらの取組を通して、身近な自然や生き物に主体的に関わろうとする態度を育むとともに、環境を大切にしようとする意識をさらに高めることができました。



ある夏の日を観察の様子です。間近でみる実や葉の大きさに驚きの表情を浮かべていました。

●ボランティア委員会の活動のようす

本校では、異年齢集団の中で児童会への所属意識・自治意識を系統的に育てるため、4年生から委員会に所属しています。児童が学校生活における課題を自分事として捉え、より良い学校を目指して話し合いながら、主体的・実践的に活動することを大切にしています。

後期ボランティア委員会では、「学校環境をより整えたい」という思いから、自分たちにできることについて話し合いました。その結果、前期から取り組んでいた校舎内外の清掃に加え、敷地内のごみ拾いや雪かきを定期的に行うことになりました。委員会の時間を使ってごみ拾いをしたり、雪が降った日には雪かきをしたりする他、汚れがちな昇降口の清掃にも継続して取り組みました。活動を通して、学校環境を整えようとする意識や、美化に進んで取り組もうとする姿勢を高めることができました。



雪解けの時期に汚れがちな昇降口付近を丁寧に掃いている様子。学校全体としても、環境美化への意識が高まりました。

3. 学生の環境活動

環境マネジメント 学生委員会の取組



委員会活動について

委員長 新沼 遼佳 (人文社会科学部 3年)

私たち岩手大学環境マネジメント学生委員会 (EMSC) は、グリーンキャンパス、環境教育、廃棄物、企画、広報・Webの5つのチームで構成されており、各チームが専門性を発揮しながら、学内および地域における多様な環境活動に取り組んでいます。

活動の主な成果の一つは、企業と連携した「いわてリサイクリエーションプロジェクト」です。約2年間にわたって1,240枚もの詰め替えパックを回収するという地道な努力を重ねてまいりました。回収作業には多くの苦労もありましたが、それらを組み立てが可能なブロックへと再生させ、小川智学長の肖像パネルとして10月の大学祭で披露しました。このプロジェクトは、私たちの活動が目に見える形となった最大の成果であり、大きな喜びでした。

もう一つの成果は、地域の環境保全プロジェクトである「トヨタソーシャルフェス」です。熊の出没により急遽屋内実施への変更を余儀なくされましたが、チームワークと柔軟な発想力を活かし、カーボンニュートラルを可視化した体験型のクイズを企画・実施しました。「どうすれば楽しみながらエコな行動を促せるか」を委員で考え、アイデアを出し合った経験は、非常に価値のある学びとなりました。

[TOYOTA SOCIAL FES!! \(TOYOTA HP\)](#)

こうした貴重な経験を経て、今後は「いわてカーボンフリーアクション (ICFA)」などの対外的な連携も大切につつ、それ以上に学内での存在感を高め、委員一人ひとりが日々の活動を心から楽しみ、それぞれの得意分野や個性を最大限に活かせる環境を整えていきたいです。学生らしい自由な発想と熱意を大切に、岩手大学のキャンパスから、より身近で、より活力ある環境活動を推進してまいります。

[いわてカーボンフリーアクションの活動 \(岩手県HP\)](#) [いわてカーボンフリーアクション \(テレビ岩手HP\)](#)



「いわてリサイクリエーションプロジェクト」
小川学長に肖像パネル完成を報告



「トヨタソーシャルフェス」
カーボンニュートラルのクイズの様子

広報・Webチーム

広報・Webチームリーダー 千葉 快士 (教育学部 3年)

広報・Webチームの主な活動は、環境マネジメント学生委員会の活動をSNSアカウントで発信することです。大学内の学生だけでなく一般の人々にも我々の活動を知ってもらい、当学生委員会や環境問題に対して興味を持ってもらえるよう努めています。

他には環境報告書や環境教育映像の作成を行っており、主に学内の学生や教職員の方々に向けて学生委員会の活動を紹介しています。

[環境教育映像2026](#)

また、「いわてカーボンフリーアクション (ICFA)」にも参加しています。ICFAとは、県内3大学 (岩手大学、岩手県立大学、富士大学) の学生が協働したプロジェクトチームで、テレビ岩手様をはじめとした県内企業の方々にお力添えいただき脱炭素化に向けた広報活動を行っています。脱炭素化への暮らしのヒントを紹介するショート動画の作成が主な活動ですが、昨年度は県内外の環境イベントでのコラボブース出展などたくさんの貴重な機会をいただき、より脱炭素社会への理解を深め自分達の意識を向上させることができました。

今後も学内外問わず様々な活動を通じて、学生や一般の人々の環境意識の向上につながるよう広報活動を行っていききたいです。

[いわてカーボンフリーアクション \(ICFA\) Instagram](#)



ICFAの活動の様子

企画チーム

企画チームリーダー 田畑 詩乃（農学部2年）

企画チームは、委員会内外の交流促進や活動活性化を目的として、各種イベントの企画・運営を行っています。主な活動として、新入生歓迎会や環境視察研修の企画などがあり、参加者が主体的に関われる機会を提供しています。これらの活動では、企画立案や準備、当日の運営などを担っています。

環境に関する理解を深めるための環境視察研修では、自治体や団体の取り組みを学ぶ機会として、岩手県紫波町でNPOや行政、企業の方からお話を聞き、施設の見学をしました。廃校となった小学校の活用や、木質バイオマスによる熱エネルギーの生成など、普段の生活では触れることの少ない取り組みを実際に見学することができました。これらの経験を通して、持続可能な社会の実現に向けた新たな意識や視点を得ることができました。準備段階では、広報活動や参加者募集、会場や機材の手配、予算管理など多岐にわたる業務を担いました。さらに、活動を通して得た課題を振り返り、次回の企画に活かすことで、より良い運営を目指しています。このような取り組みをすることで、今後も学生の環境意識の向上と主体的な活動参加を促進していきます。

そして、新たに植林活動にも参加しました。旧松尾鉱山跡地の裸地化した土壌を安定させ、森林機能を回復することを目的として、カエデやナラの苗木の植樹を行いました。また、植樹だけでなく、食害から守るための管理や追跡調査のためのデータとりを通して、苗木の健全な生育環境の確保に取り組みました。これにより、荒廃地の緑化の推進や土壌流出の防止、水源涵養機能の回復に少しでも貢献できたのではないかと考えています。今後もこれらの活動を通して、環境保全への意識向上と地域の自然再生に貢献していくことを目指しています。



環境視察研修の様子



植林活動の様子

グリーンキャンパスチーム

グリーンキャンパスチームリーダー 藤井 寧々（農学部3年）

グリーンキャンパスチームは毎年学内緑化活動の一環として、図書館西側の壁にアサガオを用いた「グリーンカーテン作り」に取り組んでいます。この活動の主な目的は、夏季の室温上昇の抑制による省エネルギー化とCO₂排出量の削減です。また多くの利用者が訪れる図書館に設置することで、環境問題に対する意識の向上や本委員会の環境配慮活動の周知を図っています。さらに、植物には騒音を軽減する効果があるとされており、緑豊かな空間の創出はストレス軽減や学生の学習環境向上にも寄与すると考えています。

アサガオの栽培や資材の管理については、職員の方にご協力していただきながら、本委員会の委員が中心となって行っています。具体的には、播種や水やり、ネットのメンテナンスやプランターへの定植などの作業を行っており、これらの活動を通して委員全体でアサガオの成長を見守っています。学生が主体的に参加することで、植物の成長過程を学ぶとともに、自然や環境への関心を深める機会となっています。加えて、本活動は委員以外の学生や大学を訪れた地域住民の方々にも本委員会の取り組みを知っていただくきっかけにもなるのではないかと考えています。

今後も、省エネルギー化と快適な空間づくりを通じてキャンパス全体の環境負荷低減を目指すとともに、緑豊かで環境に優しいキャンパスづくりを推進し、学生や地域における環境意識の醸成と持続可能な社会の実現に貢献したいと考えています。



図書館付近のグリーンカーテン

環境教育チーム

環境教育チームリーダー 三上 絢香（人文社会科学部 2 年）

環境教育チームは、子どもたちが環境に親しみ、環境問題への関心を高めることを目的に活動しています。9月には、つつみ幼稚園の子どもたちを対象に「水の大切さ」をテーマとし、「水は限りある資源であること」「限りある資源を大切に、無駄なく使うこと」を中心メッセージに掲げて準備を進めました。節水や世界の水事情といった内容でクイズを交えて講演を行い、講演の後にはろ過実験やすごろくゲームを行いました。どのような場面で水を使っているのか、水を使いすぎないようにする工夫など幼稚園児自身が日常生活を振り返りながら楽しく学べるように心がけて準備をしました。当日は、子どもたちが一生懸命に活動に取り組んでくれて、お風呂の水の活用方法や水がないと困ることなど、水に関する話題を子どもたち同士でお話しているのが大変印象的でした。また、ろ過実験では子どもたちが、泥水が透明な水になるまでの過程を実際に目で確かめながらろ過のはたらきの効果を感じていました。



つつみ幼稚園での環境教育

今後も、子どもたちが少しでも環境に対して興味や関心を持てるような企画を考案・提供をし、活動の幅を広げていきたいと考えています。また、子どもたちの自然環境への理解を深める活動を考えていくとともに自分自身の環境に対する理解も深めていけるよう取り組んでいきます。

廃棄物チーム

廃棄物チームリーダー 田中 珠貴（農学部 3 年）

廃棄物チームでは、岩手大学内外の廃棄物にまつわる様々な活動を行っています。主な活動としては、毎月行っている岩手大学のゴミステーションをまわり、燃えるゴミやプラスチック、ペットボトルなどの廃物がどれほど分別されているかを調査するゴミ分別調査や、所属委員の交流を兼ねた二ヶ月～三ヶ月に一度のゴミ拾いなどがあります。ゴミ分別調査の意義としては、学内のゴミ分別調査の結果を岩手大学の学生や教職員に向けて配信することで、ゴミ分別に対する意識を向上させることが挙げられます。毎月のゴミ分別調査の結果から、特にゴミ分別率が芳しくないものを、分別するように強化的に周知することで、毎月少しずつ分別率を上げていけるように委員一同取り組んでいます。



ゴミを拾って地球を軽くする
「ジャンプゴミ拾い」

また、学内外を問わず、大学周辺や構内での清掃活動を精力的に行っています。ゴミ拾いをきっかけに入会したメンバーも多く、多くの委員が主体的に参加する、委員会にとって非常に重要な活動です。この活動を通じて、廃棄物問題への意識を高めるだけでなく、身近な環境への理解を深める貴重な機会となっています。

廃棄物チームは、学内全体の廃棄物に対する意識を高めるとともに、誰もが正しく分別できる環境づくりを推進していきます。



モリーちゃん

岩手大学環境マネジメント学生委員会 シンボルキャラクター

本報告書において、学生委員会が関係している活動にはSDGsのラベリングと併せてアイコン表示しています。

岩手大学野鳥の会

代表：梅村 一輝（教育学部2年）

公式連絡先 Xアカウント (@gandai_yachou [🔗](#))

【普段の活動】

当会では、毎週土曜日に高松の池周辺を歩きながら野鳥を観察・記録する「朝たん」を行っています。高松の池には、冬はカモやハクチョウを中心とした冬鳥が、夏には美しいさえずりを響かせる小鳥たちが訪れ、季節ごとに異なる姿を見せてくれます。「毎週行っても見られる鳥は同じじゃないの?」と聞かれますが、実際はそうではありません。多くの野鳥は渡り鳥であり、特に春や秋の渡りの時期には、渡りの途中に立ち寄る普段は見られない野鳥に出会えることもあります。そのような野鳥たちを双眼鏡でじっくり観察したり、写真に収めたりと、会員それぞれが自由に楽しんでいます。また、宮城県の伊豆沼にガンの飛び立ちを見に行ったり、青森県龍飛崎にタカや小鳥の渡りを見に行ったりと県外への遠征も行なっています。



朝たんの様子

【調査・環境整備活動】

当会では、年2回実施される「イヌワシ調査」をはじめ、青森県仏沼で行われる希少種オオセッカの個体数を把握する「オオセッカー斉調査」や「ガンカモ調査」などの調査活動に協力しています。普段とは異なる

環境での調査は大変興味深く、新たな出会いや発見も数多くあります。また、環境整備活動として、毎年秋に「イヌワシの森整備事業」のお手伝いを行っています。イヌワシは絶滅が危惧されている大型猛禽類であり、環境の変化などが原因で全国的に個体数が減少しています。そこで、イヌワシが狩りをしやすい環境を整えるため、森林内を帯状に間伐したり、餌となるノウサギの隠れ場所を設けたりすることで、餌資源の増加につながる取り組みを行っています。



イヌワシの森の間伐地の様子

【野鳥を通して環境を考える】

野鳥を継続的に観察・記録していると、減少している種がいることにも気が付きます。渡り鳥は繁殖地・中継地・越冬地と広い範囲を移動しますが、それぞれの地域が気候の変化や人間の手によって何らかの影響を受けているからです。そのような現状を調査や観察を通して知ること、「なぜ減少しているのか」「どうすればその減少を食い止められるのか」といった疑問を持ち、野鳥の会の活動が自然環境について考える契機になればと考えています。

『学内カンパニー』活動と環境活動カンパニー紹介



理工学部附属ものづくりエンジニアリングファクトリー

起業家支援室 佐藤 井上

学内カンパニーは今年で17年目を迎えます。当初2009年度から5年間は文部科学省の教育改善プログラムとして予算措置がなされ、2014年度以降は岩手大学における自主運営事業として継続している独自の取り組みです。ものづくり人材教育の強化及び、将来の起業家を目指す学生の支援を目的とし、教育で得た知識を実践するものづくりを総合的に体験する場を提供しています。教職員や大学内外の協力者の支援を受けながら、学生が主体となって起業した事業を、仮想カンパニー（バーチャルカンパニー）の形で実現・運営するその活動が学内カンパニーです。

2025年度は10のカンパニーへ合計104名の学生が参加、活動しました。ここでは、環境活動に関連する活動を行っている「Occasions」を紹介します。

学内カンパニー『Occasions』

代表（社長）：三浦 聖音（理工学部マテリアルコース 3年）

副代表（副社長）：黒坂 優人（理工学部マテリアルコース 3年）

※カンパニー名、代表者の所属は2025年のものです

●活動を始めたきっかけ

木は地球温暖化を引き起こす温室効果ガスの二酸化炭素を吸収し、光合成で栄養を作ると共に酸素を出すことから持続可能な循環型社会の実現に大きく貢献する再生可能資源です。岩手県は森林面積を約117万ヘクタール有し北海道に次ぐ全国2位、県土の約77%は森林に覆われています。そのうち約48万ヘクタールが人工林であり、県土の約32%を占めます。木も年を取り、50年を過ぎてくると二酸化炭素の吸収量が減少することから、「植える・育てる・使う・また植える」というサイクルを繰り返すことが必要です。木の利用を促すことで、そのサイクルに貢献することを目指しています。

●活動概要

本カンパニーは2023年から活動しています。盛岡の伝統芸能であるさんさ踊りで使用する太鼓の胴には桶が使われています。現在その桶は岩手県内で生産されておらず、他県に発注しているという状況から、このままでは伝統が失われかねないという危機感を持ち、我々がその桶を制作することを目標に、木材加工技術の習得に励んでいます。この技術習得の過程で身につけた木材加工技術を利用し、学内のイベント等で有償・無償で提供できる木工商品の製作にも取り組んでいます。また昨年から、県内の漆の木の間伐材の提供を受け、その特徴を生かす利活用についても取り組んでいます。



図-1 習作1



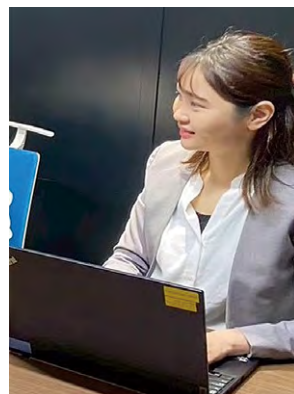
図-2 習作2



図-3 目標プロの制作過程

岩手大学『環境報告書2024』「ステークホルダーによる環境報告書の評価」で頂戴した提案に基づき、環境関連分野に取り組む岩手大学卒業生の活躍を紹介します。

岩手県内の行政機関で環境政策業務に従事されたキャリアをお持ちの阿部円香様のインタビューの概要を掲載します。



阿部様＆「モリーちゃん」

岩手大学在学中の学びと活動

岩手県で自然に親しんで育った経験を背景に、文系・理系双方の視点から環境を学べる岩手大学人文社会科学部環境科学課程に進学しました。

旧松尾鉱山の排水処理施設の見学や水質調査を通じて、公害問題を扱った講義では、人間が壊した環境を長期的に回復・管理していく現実が印象深かったです。

3年次には国際研修でアイスランドを訪問し、再生可能エネルギー100%の地域社会のあり方を学び、岩手県の自然資源にも応用できる可能性を考えました。そのことがきっかけで、卒業論文では、岩手県における再生可能エネルギー自給率100%を想定したエネルギーミックスをテーマに取り組みました。

課外活動では環境マネジメント学生委員会(EMSC)に所属し、環境報告書作成などに関わり、地域企業や学外の人々とコミュニケーションを取る経験を得ました。

岩手大学卒業後の進路と活躍

岩手大学卒業後は、岩手県内で働きたいという思いと県内各地の魅力や課題に関わりたいという考えから岩手県庁を志望しました。

大学時代に学んだ再生可能エネルギーや岩手県の自然資源に関する知識、アイスランド研修の経験は、採用面接でも自身の強みとしてアピールしました。

県庁入庁後は自然保護課を皮切りに、大船渡市での

業務、環境生活企画室での地球温暖化対策、現在の保健福祉部での業務など、幅広い行政分野を経験しています。

特に環境生活企画室では、大学生と連携した脱炭素化広報事業により「いわてカーボンフリー・アクション(ICFA)」と一緒に、Z世代が楽しみながら脱炭素を自分ごととして発信する仕組みづくりに取り組みました。ICFAには、岩手大学のEMSCからも多くの学生さんに参加いただいています。社会的意義だけでなく、「楽しさ」や「自分へのメリット」を感じることが、行動変容への第一歩となることを実感しています。

岩手大学生へのメッセージ

環境は、生活の土台となる非常に広いテーマであり、どの職業選択をしても避けて通れない重要な知識だと思います。地球温暖化による熱中症リスクや災害の激甚化など、環境課題は社会全体の課題となっており、大学で環境を学ぶことは将来の大きな強みになります。

また、環境分野に限らず、大学時代に課外活動・アルバイト・サークル・趣味などに本気で打ち込む経験は、社会に出て困難に直面した時の突破口や新しい選択肢の源になります。予測不可能な時代を生き抜く力を大学時代に身につけ、持続可能な社会をつくる一員として活躍してほしいと期待しています。

4. 構内事業者の取組

岩手大学生生活協同組合の環境への取組



組合員が環境について知り、考え、自ら選択して環境の取組を行える場面を作り出していきます。

●「学食BENTO弁当」の容器の回収を実施しています。

岩手大学生協ではオリジナルの弁当、「学食BENTO」を販売しており、容器として「はがせるトレーP & P リ・リパック」を使用しています。使用後に、直接食材が触れていたフィルムを剥がすことで、容器を洗浄せずにリサイクルに回すことが出来るため、洗浄排水及び廃棄物排出量の削減ができます。

現在、岩手大学構内各所に「学食BENTO弁当容器回収BOX」を設置し、BOXに溜まった容器を定期的に生協学生委員会が回収してメーカーに送ることで、再生原料化されて新しい容器に生まれ変わります。

2025年度は、学生委員会でコタ東北とたんぽぽ作業所の見学を行い、リ・リパックの製造過程やプラスチックトレーのリサイクル過程を学びました。この見学の模様を食堂内に掲示し、組合員にも製造過程などを知らせました。



容器回収率掲示ポスター



容器回収BOX



容器回収の様子



リ・リパック工場見学

●グラスファイバー箸と国内間伐材割り箸を使用しています。

食堂で使用するお箸には再利用できるグラスファイバーのお箸と国内間伐材の割り箸を、購買店舗では配布するお箸を全て国内間伐材の割り箸にしています。

国内間伐材の割り箸はNPO法人「樹恩ネットワーク」から南会津の工場のもを取り寄せています。



割りばし回収

「樹恩割り箸」の回収も今年度から再開しました。樹恩割り箸は間伐材から作られた割り箸で、森林保全につながるほか、障がい者の雇用拡大にも貢献しています。回収された割り箸はペレットとなり、再利用されます。

※NPO法人「樹恩ネットワーク」の詳細は下記ホームページにてご確認ください。

https://juon.or.jp/activity/activity_53.html

●食堂の取り組み

食堂・購買では売れ残りなどで食品残渣が排出されています。

食堂では、提供前の廃棄を減らすために、昼や夜のピーク時以降は少バッチ（1回の調理で作る人数分を減らす）で調理するとともに、学事を把握して客数や出食数を計画し、食材の廃棄を減らすようにしています。また、調理工程での廃棄を減らすために、前加工は専用工場で行っています。年間の廃棄量は約4.0トンとなっています。また水質汚濁の防止と地産地消、フード・マイレージの削減のため、米は奥州市の「金色の風」無洗米を使用しています。

購買店舗でも学事を把握して客数や販売個数を予測し、売れ残りの廃棄を減らす工夫のほか機会損失による販売減少を防ぐ工夫をしています。機会損失（買おうと思ったときに商品がない状態）を減らすことで、「商品がどうせないから生協に行かない」という来店客減少による供給数減少、商品廃棄を防ぐようにしています。最近ではAIを使った発注システムにより精度向上を図っています。

●新入生向け中古家電品の販売

2010年12月より、市内の中古品販売業者と提携し、卒業生から家電品の引き取りを行い、新入生向けに販売をしております。生協では卒業する4年生向けに家電品の引き取り案内を宣伝し、申込者は直接中古品販売業者に連絡してもらいます。また、引き取られた家電品は生協の新入生サポートセンターで新入生に販売します。



中古家電品リサイクル販売

この取組をはじめめるまでは、生協管理アパートのゴミ置き場に家電製品があふれる状況だったのが、取組を初めて以降は殆ど無くなりました。

2016年度より不動産部店頭で提携業者の買い取りチラシを配布し、卒業予定年の組合員には、6月に開催している卒業生向け「はばたけフェア」のブースや12月に送付する生協脱退の案内と一緒にリーフレットを配布して告知をしています。新入生の利用額も年々増加しています。

5. 地域における環境コミュニケーション

環境関連の 外部委員会などへの参画



●参画先別件数

省庁	岩手県	県内市町村	他県	各種法人	企業	その他	計
26	49	38	18	43	19	13	206

●主な参画先

	従事先	従事先の職名
省 庁	国土交通省東北地方整備局	河川水辺の国勢調査アドバイザー
	国土交通省東北地方整備局	岩手山火山噴火緊急減災対策砂防計画検討会
	東北森林管理局	東北森林管理局国有林材供給調整検討委員会
	環境省東北地方環境事務所	災害廃棄物対策等東北ブロック協議会
	林野庁東北森林管理局	早池峰山周辺地域ニホンシカ生息状況調査検討委員会
	農林水産省農村振興局整備部	農業用ため池廃止工事検討委員会
岩 手 県	岩手県農林水産部	岩手県鳥獣被害防止対策推進会議
	岩手県農林水産部	林業普及指導事業外部評価懇談会構成員
	岩手県環境審議会	岩手県環境審議会・循環型社会計画策定特別部会
	岩手県環境生活部	岩手県公害審査委員
	岩手県南広域振興局	ツキノワグマによる農作物等被害対策研修会
	岩手県東日本大震災津波復興委員会	岩手県東日本大震災津波復興委員会
県 内 市 町 村	盛岡市	廃棄物処理施設等設置等専門委員会
	大船渡市	大船渡市文化財調査委員
	一関市	SDGs推進事業に係る講師派遣
	紫波町	紫波町都市計画審議会委員
	陸前高田市	陸前高田市防災マイスター養成講座に係る講師
	雫石町	雫石町環境審議会
各 種 法 人	公益財団法人 地震予知総合研究振興会	「東北地方・太平洋沖の地震活動に関する調査研究」研究委員会
	一般社団法人日本森林技術協会	「林道施策の実施状況の検証及び指標設定に向けた調査委託事業」に係る路網整備検討会
	公益財団法人日本自然保護協会	三国山地/赤谷川・生物多様性復元計画推進事業への委員派遣
	一般社団法人長野県林業コンサルタント協会	森林路網DX推進事業検討会に係る検討会委員
	独立行政法人エネルギー・金属鉱物資源機構	洋上風力基礎調査検討委員会
	公益財団法人日本生態系協会	里山林活性化による多面的機能発揮対策評価検証事業検討委員会

環境問題に関する研究会など



- 岩手大学ネットワークシステム（INS）活動
- スマートエネルギー工学研究グループ
- 岩手農林研究協議会（AFR）
 - 岩手・木質バイオマス研究会
 - 木勉会（木を勉強する会）

- 農学部附属植物園運営委員会
- 教育学部附属自然観察園運営委員会
- 岩手大学ツキノワグマ研究会
- 有機農業研究会
- WILD野生動物研究会

地域課題解決プログラム



桑園周辺域における野生動物相と食害の調査

－効果的な野生動物の防除および桑産業と桑園がおりなす里山環境の持続的な保全にむけて－

農学部動物科学科 野生動物生態学研究室 清水 まいや (2025年度4年生)

農学部動物科学科 斎藤 梨絵

共同研究者：農学部動物科学科 出口 善隆、築城 幹典

更木ふるさと興社 福盛田 洋幸

〈研究の背景と目的〉

中山間地域は、人間活動と野生動物の生息域が重なる境界（緩衝）域として、野生動物と人との共存において重要な場所である。岩手県北上市更木地区は、伝統的な桑の産地として知られ、里山景観が残された中山間地域に桑畑がある。しかしながら、桑園では野生動物による桑の苗木の食害が深刻化している。そこで本研究では、更木地区の桑園において、野生動物相を調査し、桑に食害をもたらす動物種の特特定と里山環境に配慮した防除方法の検討を行うことを目的とした。

〈調査方法〉

北上市の更木ふるさと興社が管理する桑園において、2025年6月から12月に調査を行った。動物相の把握のため、桑園内および畑の周辺域に自動撮影カメラを計10台設置した。種判別は、基本的に動画で行い、出現種、活動時間などを解析した。また、10月に、桑の木から葉と食痕部を採取した。食痕部からDNAを抽出し、LAMP法を用いてニホンジカ（以下、シカ）およびニホンカモシカ（以下、カモシカ）の種判別を行った。さらに、野菜ネットで作成した低コストな防除ネットを使用し、本防除法が桑の成長（葉の枚数と幹の太さ）に与える影響を、調査前後および防除ネットの有無による差の検定により評価した。

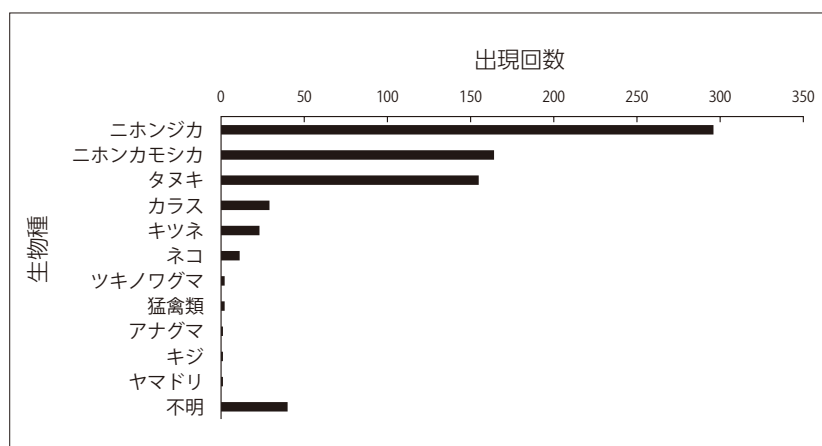


図1 カメラトラップ調査における各生物種の出現回数

〈結果と考察〉

自動撮影カメラの結果から、哺乳類7種、鳥類4種が確認された(図1)。全725回の出現イベントのうち、出現回数はシカで最も高く(296回)、続いてカモシカ(164回)であった。シカは主に夜間に、カモシカは日中、夜間に関わらず全時間帯で撮影された。カメラ映像から、シカとカモシカの双方が桑を採食する様子が確認された。

LAMP法に基づく解析では、陽性反応がみられたサンプル(41/86サンプル)のうち、9サンプルがシカ、32サンプルがカモシカと判定された。以上より、桑の食害にはシカとカモシカの両種が関与している可能性が示された。

さらに、防除ネットを設置した区画では、ネットを設置しなかった区画に比べ、桑の葉および幹の成長量が有意に大きかった(マン・ホイットニーのU検定, $p < 0.01$, 図2)。従って、防除用ネットは、桑の木の苗木の食害軽減に有効な手法であると考えられた。防除用ネットは、農業で重要な桑の苗木を保護しつつ、野生動物がその他の資源と空間を利用できるという点で、里山環境と調和した効果的な防除方法となることが期待される。

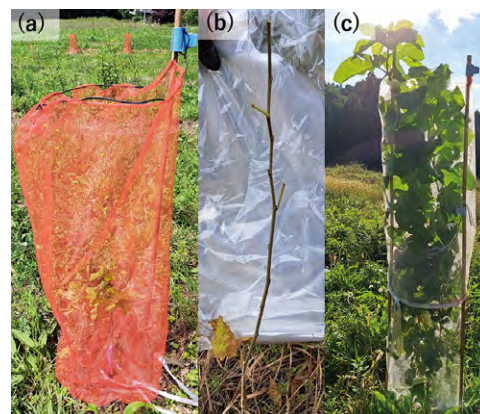


図2 桑の苗木と防除法による違い

ネットによる防除を行った苗木（調査開始初期、a）、防除を行わなかった苗木（10月時点、b）およびネットによる防除を行った苗木（10月時点、c）

6. 環境方針

岩手大学環境方針

岩手大学は、環境マネジメントシステムを実施する上での基本的な方針を定めています。

[岩手大学環境方針](#) 

基本理念

岩手大学は、地球環境の保全・再生が21世紀の最重要課題の1つであると認識し、環境意識の高い人材の育成をはじめ、環境保全・再生に向けた教育・研究を積極的に推進し、SDGs（持続可能な開発目標）を踏まえ、持続可能な社会の実現に貢献します。

またその一環として、岩手大学内の活動のすべてにおいて、大学・附属学校構成員及び常駐する大学関係者が一致協力して環境に配慮し、大学の社会的責任として環境負荷の軽減と環境汚染の予防やキャンパス環境の改善に努めます。

基本方針

岩手大学は、基本理念を実現するために、岩手大学ビジョン2030に基づいた中期計画を踏まえ以下の活動に積極的に取り組みます。

1. 環境保全・再生に係わる教育・研究を意欲的に展開し、社会が求める環境意識の高い人材を養成します。
2. 環境に係わる教育・研究の成果を踏まえ、地域社会を含むあらゆる人々に対する教育、啓発、普及活動などに取り組みます。
3. 地域のNPOや行政等と連携して、地域の環境保全・再生の取組、生物多様性の保全に積極的に関与します。
4. 環境に関連する法令及び岩手大学が同意する環境に関する要求事項を順守するとともに、環境マネジメントシステムによってキャンパス環境の継続的改善を図ります。
5. 本方針を踏まえて、毎年目標を定め、省エネルギー・省資源、廃棄物削減、再資源化、グリーン購入などに積極的に取り組み、カーボンニュートラル実現に向けCO₂排出量を2030年度に2013年度排出量の50%に削減します。
6. 環境方針をすべての構成員に周知し、実行するとともに、その結果を広く一般にも文書及びインターネットで公開します。

2006年1月26日制定

2025年3月27日最終改正

岩手大学長

岩手大学ビジョン2030

2021年7月、岩手大学は2030年を見据え、目指すべき方向性を示す『[岩手大学ビジョン2030](#) 』を制定しました。

7. 岩手大学の概要

運営組織・教育研究組織

運営組織・教育研究組織等の詳しい大学情報は『[令和8年度版岩手大学概要](#) 』をご確認ください。

8. 岩手大学の環境マネジメント

環境マネジメントシステム運営組織

環境マネジメント推進室HP「環境マネジメント運営」[🔗](#)

環境配慮の取組に関する目標及び計画の達成状況

6 安全な水とトイレを世界中に

7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに

12 つくる責任つかう責任

13 気候変動に具体的な対策を

●2025年度岩手大学環境目標及び活動計画

環境目標／活動計画 達成状況： GOOD! 達成 Ooh.. 未達成

環境方針等 (EA21要求事項)	環境目標	活動計画	環境目標/ 活動計画 達成結果
Ⅰ. キャンパス環境の改善	分かり易い環境マネジメントシステムの運用を図る。	1.新体制での内部監査を実施する。	GOOD!
	上田キャンパス内に生物多様性の保存地域を設定する。	2.自然共生サイトへの登録を検討する。	GOOD!
Ⅱ. エネルギーの使用 (二酸化炭素排出量の削減)	公用車のガソリン・軽油等の利用の削減を図る	1.ユニットで使用している公用車について、電動車への転換可否を検討する。	GOOD!
	2030年のCO ₂ 排出量を2013年度比で50%削減目標を構成員全体への周知を図る。	2.実行計画 ¹⁾ を周知する。	GOOD!
	LED設置率を2024年度から2ポイント上げる。	3.LEDへの更新を図る。	GOOD!
	PPA方式による太陽光発電施設の設置について検討する。	4.PPA方式による太陽光発電施設設置のための基本情報を収集する。	GOOD!
	調達電力の再生可能エネルギー割合を検討する。	5.調達電力に占める再エネ電力比率の設定に向けた検討を行う。	GOOD!
	環境取組チェックリストを積極的に活用する。	6.環境取組チェックリストの取り組み内容を精査する。	GOOD!
Ⅲ. グリーン購入	グリーン購入実績のデータをもとに、コピー用紙、コピー機使用量及び印刷外注の軽減を図る。	1.各部局のコピー用紙、コピー機の使用量及び印刷外注の件数や印刷数量等の現状を把握し、DX化を踏まえた軽減策を検討する。	GOOD!
Ⅳ. 廃棄物等の排出 (廃棄物排出量の削減)	リサイクルの推進に向けた取組を行う。	1.知られていないリサイクルの技法などをSNSを通じて発信する	GOOD!

1) 岩手大学がその事務及び事業に関し温室効果ガスの排出の削減等のため実行すべき措置について定める計画



環境目標／活動計画 達成状況： GOOD! 達成 Ooh.. 未達成

環境方針等 (EA21要求事項)	環境目標	活動計画	環境目標/ 活動計画 達成結果
V. 環境教育 環境人材教育 (環境に関する教育 (環境人材の育成))	構成員に対し環境課題に関する情報発信を行う。	1. 環境セミナーを開催する。	GOOD!
	効果的な環境人材育成プログラムの再構築を図る。	1. 地域協創教育センター「イーハトーヴ協創コース」環境人材育成モデルにおける関連選択科目・学外実習を開講、実施する。	GOOD!
	学部生への効果的な環境教育を実施する。	1. 学部生に地域協創教育センター「イーハトーヴ協創コース」環境人材育成モデルの周知を行う。	GOOD!
	附属幼稚園では、花や野菜の栽培等を通して、植物が育つ環境について関心をもつ活動を行う。	1. 花の栽培や野菜作りで水やりや草取りなどの世話をする。それらを通して、自然の美しさ、豊かさ、不思議さなどに気づいたり、成長する様子に関心をもったり、命の大切さを感じたり、収穫の喜びを味わったりする。	GOOD!
	附属小学校では、「総合的な学習の時間」等を活用し、自然観察や地球温暖化の学習など環境について学ぶ場を創る。また、委員会やたてわり活動を通して、環境に配慮した活動を行う。	1. 総合的な学習の時間や各教科の学習において、環境について自分ができることを考え表現する活動を行う。	GOOD!
		2. 委員会等の活動として、冬季の除雪作業や校庭の石拾いを行う。	GOOD!
	附属中学校では、環境を守りはぐくむ心と感受性を育て、環境美化活動、エネルギーの節約等に配慮した生活・行動を実践できるよう指導する	1. 生徒会活動による校地及びその周辺の清掃・環境美化活動を行う。	GOOD!
		2. ボランティア委員会による附属幼稚園等の清掃・環境美化活動を行う。	GOOD!
	附属特別支援学校では、作業学習等で使用する原材料のリサイクル化を推し進めるとともに、委員会活動や生徒会活動における資源回収を通して環境活動を実施する。	1. 空き缶、古新聞等の「資源回収」について、引き続き全校に呼びかけ、中学部の委員会活動で取り組む。	GOOD!
		2. 高等部環境委員会では、継続してペットボトルキャップの回収及び洗浄を行う。併せて、回収後のキャップを回収業者へ持ち込む活動に取り組む。	GOOD!
	EMS学生委員会では環境活動を積極的に実施する。	1. これまでの環境活動を精査し、PDCAサイクルに基づき継続する活動についての改善を図る。	GOOD!
		2. 教職員が学生委員会の活動に積極的に参画し活動内容を共有する。	GOOD!



環境目標／活動計画 達成状況： GOOD! 達成 Ohh.. 未達成

環境方針等 (EA21要求事項)	環境目標	活動計画	環境目標/ 活動計画 達成結果
VI. 環境関連研究 (研究及び地域や社会への還元)	環境関連研究の見える化を図る。	1.段階的情報発信整備に向け、発信情報の受け手を想定し、試験的に環境関連研究の情報を発信し効果を検証する。	GOOD!
	各学部・研究科の特色を活かした環境関連研究を推進する。	1.人文社会科学部としての総合科学的な環境関連研究を推進する。	GOOD!
		2.教員養成学部として、学校現場などの教育実践への活用や地域ニーズに応える環境関連研究を推進する。	GOOD!
		3.ソフトパス理工学の理念に基づき、ソフトパス理工学総合研究センター及び学部・研究科における持続可能な社会づくりに向けた理工学分野の環境関連研究を推進する。	GOOD!
		4.農学部と獣医学部は農林漁業並びに畜産業の発展に資す環境関連研究を推進する。	GOOD!
VII. 構内事業者の取組	放送大学岩手学習センターにおいて環境に配慮した取組を実施する。	1.放送大学学生に環境保全活動の啓発を推進する。	GOOD!
	プラスチックごみの削減に努める。	1.学食BENTOリ・リパック容器の研究室、ゼミでの集団回収を実施する	GOOD!
	食品残渣のリサイクルを検討する。	2.調理加工済みの食品残渣リサイクルに向けた方法を引き続き検討する。	GOOD!
VIII. 地域社会に対する取組 (社会貢献)	持続可能な漁業に向けた取組みを行う。	1.地域でのイベント等で機会があれば、本キャンパスでの研究や調査などで得られた知見を活かし、講演や発表、展示等を行う。	GOOD!
	環境活動結果の効果的な情報発信	1.環境報告書の情報発信ツールとしての利用方法を検討する。	GOOD!
	環境報告書の信頼性の向上を図る。	1.環境報告書の自己評価を実施する。	GOOD!
IX. 法規制順守	法規制に関わる製品の購入・使用・廃棄時には法規制遵守評価シートによる確認を行う。	1.ボイラー、フロン類使用製品の購入・使用・廃棄時には法規制遵守評価シートによる確認を行う。	GOOD!

9. 環境負荷低減への取組



総エネルギー投入量 ●光熱量等の削減の推進

取組

- ①電気・A重油・灯油・ガソリン・軽油・都市ガス・LPGの7エネルギーの毎月の使用料を算出し、電気使用量に津邸は、部局ユニット別にも算出し、集計した。
- ②空調機の清掃を行うとともに冷暖房時の室温管理を行った。
- ③照明器具の清掃・交換等、適正管理を行った。
- ④教室・事務室等の照明は昼休み、残業時等不要なものを消灯する。(窓口業務を除く)

成果

2025年度の総エネルギー排出量は、前年度より1.9%増の163,602GJとなった。

【増加の要因として考えられるもの】

- ・2024年度に滝沢演習林学生宿舍の空調整備を行い、2025年度から稼働したことに伴い、電気使用量が増加。
- ・栗石キャンパスに新設した牛舎の稼働に伴い、電気使用量が増加。
- ・GHPエアコンを修繕および更新したことにより、故障していた機器が再稼働し都市ガス使用量が増加。
- ・公用車を使用して遠隔地に行く頻度が多くなり、ガソリン使用量が増加。

●年度別エネルギー投入量

* 過去5年の推移

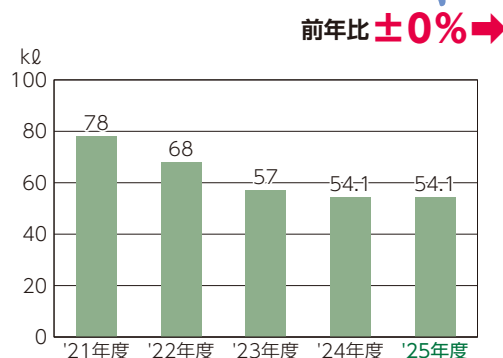
●総エネルギー投入量（熱量換算）



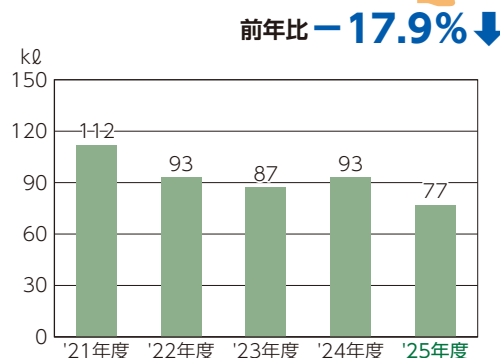
●電気



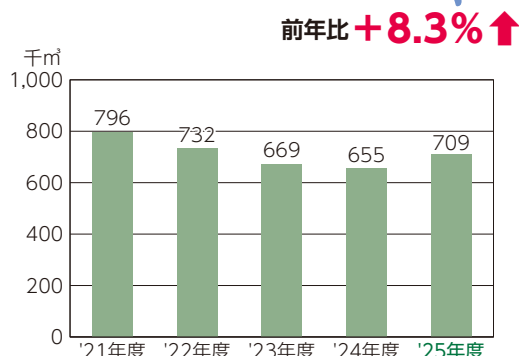
●灯油



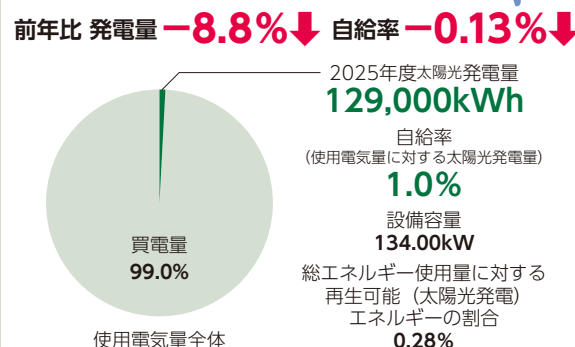
●A重油



●都市ガス



●再生可能エネルギー（太陽光発電）



全熱量の99%を占める4エネルギー【電気（76%）、都市ガス（20%）、A重油（2%）、灯油（1%）】の使用量をグラフ化。

水資源投入量 ●水道使用量の削減の推進

取 組

- ①毎月の水道使用量をユニット別に算出し、前年度と比較した。
②部局ユニット別に前年度に設定したベースラインとの比較を行った。

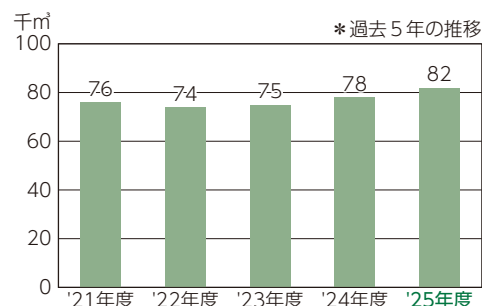
成 果

2025年度は82,439m³と前年度より5.7%の増加となった。

●年度別水道使用量



前年比 **+5.7%** ↑



総物質投入量 ●紙使用量の削減の推進

取 組

- ①印刷機の省資源機能（中綴じ印刷・Nアップ等）を積極的に活用する。
②学内LAN、ペースベータ等の利用による文書の電子化を進める。
③ICT機器の利用により会議のペーパーレス化を積極的に実施する。
④各会議の資料をグループウェア（ガルーン）上に掲載する。

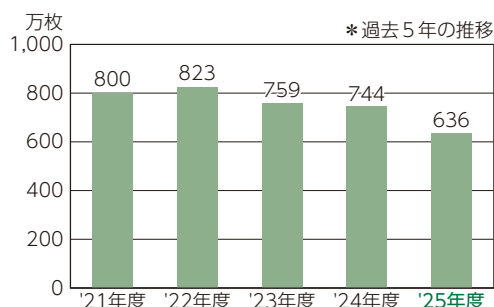
成 果

全体では、使用量636万枚（A4換算）と前年度よりも14.5%の削減となった。

●年度別再生紙等使用実績



前年比 **-14.5%** ↓

温室効果ガス等の排出量 ●CO₂排出量削減の推進

●年度別二酸化炭素排出量

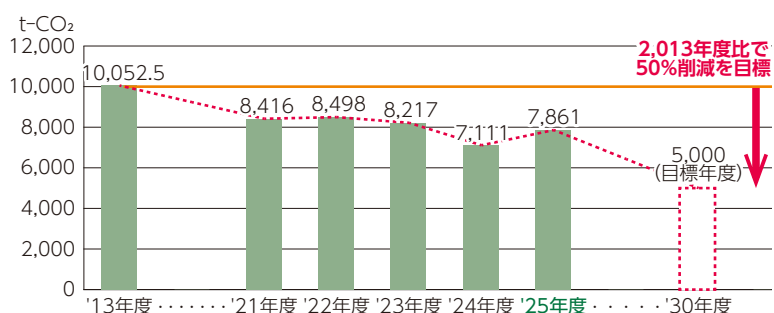


前年比 **+10.5%** ↑

CO₂排出量を前年度比で1%削減する取組を行ったが、10.6%増加した。

岩手大学では、2030年度までに、CO₂を2013年度比50%（約5,000 t-CO₂）削減を目標として取り組んでいる。

2025年度時点で2013年度比約21.8%削減達成しているが、前年度比で10.6%増加していることもあり、改善が必要とされる。



東北電力：調整後排出係数0.421t-CO₂/千kWh

化学物質排出量及び管理状況 ●化学薬品管理の全学一元化の推進



目的・目標

- 目的
実験廃液の適切な回収と不要化学薬品の処分を推進することで、化学物質が環境に与えるリスクを低減する。
- 目標
実験室内の実験廃液の保管量が、必要以上に増加することを防ぐために、月2回の定期回収を実施する。
不要となった化学薬品については、安全の確保と環境リスク低減のため、速やかな処分を推進する。

取組

- ・2025年度は、無機廃液を約3.9トン、有機廃液を約11.0トン、合計14.9トンの実験廃液を回収した。
回収した実験廃液は、外部に委託して処理した。委託先では環境に配慮した廃液処理を実施した。
- ・教職員向けのWebサイトで化学薬品の処分にに関する情報を公開し、224本の不要化学薬品を処分した。
- ・水銀が含まれる器具（水銀温度計等）の回収を実施し、廃棄した。
- ・化学薬品の購入量と廃棄量を把握し、さらに、PRTR法の対象物質については、より詳細な移動量を把握した。
- 環境に配慮した廃液処分方法の採用
- ・廃液処理のゼロエミッション化の推進
埋め立て量の削減を目指して、最終処分が発生した焼却残渣などを再利用している。
再利用の用途は、セメントの原料化、鋼鉄・非鉄原料化、油分は助燃剤や代替燃料として再利用している。
- ・廃液処理の二酸化炭素削減
二酸化炭素の排出量の削減を目指して、中間処理では焼却を行わず、中和処理、凝集沈殿処理などを行っている。（ジクロロメタン含有廃液のみ焼却している）

成果・資料他

- ・2025年度は計21回の実験廃液および廃シリカゲルの回収を実施した。
- ・水銀が含まれる127個の器具の処分を実施した。

●2025年度の主な化学物質の購入量と廃棄量

	購入量 (kg)	廃棄量 (kg)
アセトン	1,427	978
メタノール	960	724
クロロホルム	729	526
ジクロロメタン	691	479
ヘキサン	683	604
酢酸エチル	573	453

2025年4月から2026年3月まで

●2025年度のクロロホルムの移動量

項 目	量 (kg)
2024年度末の在庫量 [A]	584
2025年度の年間購入量 [B]	729
2025年度の年間使用量 [C]	531
年間使用量のうち廃棄量（廃液）[C-1]	526
年間使用量のうち大気放出量 [C-2]	5
2025年度末の在庫量 [D]	782

$$[C] = \{[A] + [B]\} - [D]$$

$$[C-2] = [C] - [C-1]$$

廃棄物等総排出量 ●廃棄物の分別とリサイクルの推進



取組

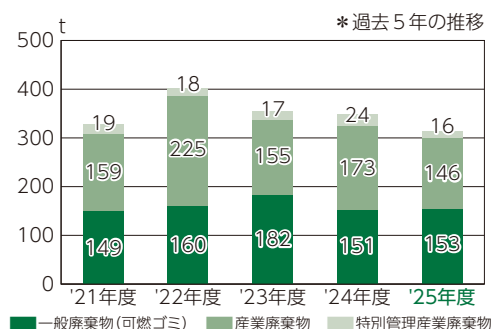
- ①環境マネジメント学生委員会がリサイクルの推進に向けた企業と共同で行ったリサイクリーションを学内に周知し、詰め替え容器の回収を図った。
- ②一斉廃棄物収集の際に小型家電のリサイクルを率先した。
- ③部局ユニットにおいて不要な物品・什器類・備品についての情報を学内発信し、学内リユースを進めた。

成 果

一般廃棄物（可燃）153 t・産業廃棄物146 t・特別管理産業廃棄物16 tの合計315 tと2024年度より33 t 減少した。
分別の徹底や、学内リユースなどにより什器等の再利用が進んだことが考えられる。

●廃棄物の排出量

GOOD! 前年比 **-9.5%** ↓





総排水量 ●下水道への環境負荷物質の排出量

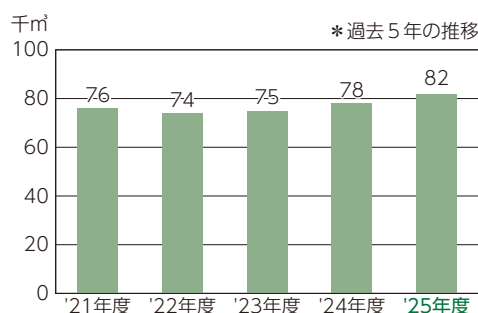
取 組

- ①水質検査方法に従い、年3回外部委託により水質検査を実施した。
- ②グリストラップでの吸着マットの使用による油脂除去を中央食堂、理工学部食堂、農学部食堂で週3回の吸着マットの交換作業により実施した。
- ③食堂排水系統の排水管の高圧洗浄を実施した。

※排水検査の結果については、P33 「環境リスクマネジメント」参照

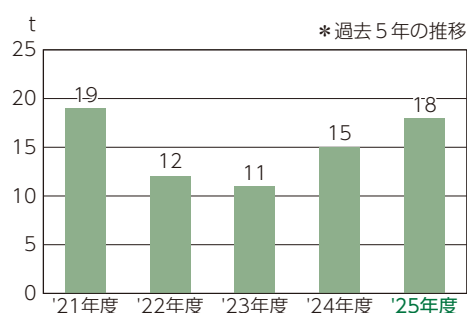
●生活・実験排水量

前年比 **+5.7%↑**



●BOD汚濁物質排出量 (推測量)

前年比 **+2.0%↑**



グリーン購入の状況 ●グリーン購入法に基づく購入の推進



岩手大学における「環境物品等の調達の推進を図るための方針」に基づき、環境ラベル認定製品や省エネルギー基準適合製品を優先的に購入しています。

- ▶環境物品等の調達の推進を図るため方針について：

<https://www.iwate-u.ac.jp/upload/choutatsuhoushinR8.pdf>

- ▶環境物品等の調達実績：

<https://www.iwate-u.ac.jp/upload/kankyou-zissekiR7.pdf>



環境配慮型製品掲載カタログ

有害物質等の漏出



毒劇物を含む化学薬品並びに実験廃液等の有害物質の環境への漏出は、2025年度には発生していません。

生物多様性の保全



遺伝子組換え生物等安全委員会は、実験の安全かつ適切な実施を確保するため、学長の諮問に応じて、遺伝子組換え生物等に関する次に掲げる事項について調査審議し、これらの事項に関して学長及び部局等の長に対し助言又は勧告するとともに、必要に応じ実験責任者及び安全主任者に対し遺伝子組換え生物等の安全管理に関する報告を求めています。

- ・安全管理に関する規則の制定改廃
- ・実験計画の法令等及びこの規則に対する適合性
- ・実験従事者の教育訓練及び健康管理
- ・事故発生の際に必要な措置及び当該事故予防のための改善策の策定
- ・その他の安全確保に関する必要な事項

委員会では、岩手大学遺伝子組換え生物等安全管理規則第12条に基づき、環境中への遺伝子組換え生物等の拡散を防止するとともに遺伝子組換え生物等実験の安全な実施を目的に、年1回以上の教育訓練を実施しており、本学で遺伝子組換え生物等実験を行う者全員に受講を義務付けております。

(2025年度実施内容)

特設ウェブページに講習資料を掲載し、下記構成の動画を視聴した後、理解度を確認するための確認クイズを受験する形式で実施しました。

(動画の内容)

- 第1部：概要
- 第2部：カルタヘナ法（基礎）
- 第3部：カルタヘナ法（拡散防止措置）

学外事業者への環境配慮依頼



岩手大学は環境目的及び目標に沿って法規制等を遵守し、環境負荷の高い活動の特定や環境方針並びに環境目標から逸脱することのないように運営管理を行っています。また、維持するために必要な運営基準を定めています。

関連事業者に対しては、文書による岩手大学環境方針の理解、キャンパス内の緊急事態発生時における対応や環境配慮行動計画書の提出などの協力を要請しています。

－特定関連事業者の皆様への環境配慮のお願い－（概要）

岩手大学では、環境マネジメント規格であるエコアクション21に則り、環境マネジメントシステムを導入しております。つきましては、以下に掲げる**岩手大学環境方針**をご理解いただき、当大学と共に環境への負荷の少ない緑豊かなエコキャンパスづくり及び**緊急事態における対応**にご協力をいただけますようお願いいたします。

本学での事業実施において、使用エネルギー量・負荷ともに環境に与える影響が大きい特定関連事業者（建設・工事事業者で1契約3,000万円以上又は工期2ヶ月間以上）の皆様におかれましては、大変お手数ではありますが、別紙の**環境配慮行動計画書**をご提出いただけますようお願いいたします。

なお、貴社の業務に関係して、岩手大学側における環境保全上対応すべきと感じられた場合には、岩手大学環境マネジメント推進室（ems@iwate-u.ac.jp）まで、ご連絡いただければ幸いです。

1. 岩手大学環境方針について

2. 緊急事態における対応について

3. 環境配慮行動計画書について

必要伝達事項	関連法規制	
①環境への負荷の少ない建築（設）資材や、リユースやリサイクルに寄与できる建築（設）資材を、選択するように心がけること。	建設工事に係る資材の再資源化等に関する法律（建設リサイクル法）	特定の建設資材について、再生資源の十分な利用及び廃棄物の減量等を通じて、資源の有効な利用、廃棄物の適正な処理を図る。
②建築・建設に伴う大気汚染、水質汚濁、騒音、振動、悪臭などを防止すること。	騒音規制法、振動規制法、悪臭防止法	建設工事に伴って発生する相当範囲にわたる騒音、振動、悪臭について必要な規制を行なうとともに、生活環境を保全する。
③建築・建設に伴う建設廃材や残土を適正に処理すること。	廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法）	廃棄物の排出の抑制、適正な分別、保管、収集、運搬、再生、処分等の処理をし、生活環境を清潔にすることにより、生活環境の保全及び公衆衛生の向上を図る。
④自動車等のアイドリングストップに努めること。	自動車から排出される窒素酸化物及び粒子状物質の特定地域における総量の削減等に関する特別措置法（自動車NOx・PM法） 特定特殊自動車排出ガスの規制等に関する法律	自動車から排出される窒素酸化物等の排出の抑制のために必要な措置を講ずるように努める。特定特殊自動車排出ガスの排出を抑制する。

資源の投入及び外部への排出状況



岩手大学が行っている教育・研究・社会貢献・企画・運営・管理・学生の自主活動では、電気・ガス等のエネルギーや水・紙などの資源を消費し、環境に負荷を与えています。本学に関わる主なエネルギーと資源の投入量と排出量を示します。

●マテリアルバランスデータ

Input



電 気
12,755 千kWh



軽 油
33 kℓ



都市ガス
709 千m³



液化石油ガス
2,704 kg



ガソリン
31 kℓ



A重油
77 kℓ



灯油
54 kℓ



紙 (A4判換算)
636 万枚



水道
82 千m³



化学物質
11.6 t



Output

温室効果ガス排出量
7,861 t-CO₂

一般廃棄物量
153 t

産業廃棄物量
147 t

下水道
82 千m³

硫黄酸化物
0.22 t

実験廃液
14.9 t

BOD汚濁物質排出量
18 t

外部への排出

東北電力温室効果ガス算出排出係数（調整後）：
東北電力0.000421t-CO₂/kWh

環境会計に関する情報



●環境コスト

2025年度に環境負荷低減のために投入した環境保全コスト（人件費は除く）は、投資額約13,307万円、費用額約9,658万円となりました。投資額・費用額ともに前年度より増加しています。

	2025年度（千円）		2025年度（％）		内容
	投資	費用	投資	費用	
(1) 事業エリア内コスト	133,074	90,494	143%	292%	
(1)-1 公害防止コスト		68,756		3103%	アスベスト・ダイオキシン類の調査・分析・除去、ボイラ等のばい煙測定
①大気汚染防止コスト		67,662		5465%	汚水排水管・測定柵の設置・清掃（排水水質分析、油水分離装置の設置）
②水質汚濁防止コスト		804		117%	土壌汚染物質測定
③土壌汚染防止コスト		290		100%	工事用防音パネル・シートの設置
④騒音防止コスト					
⑤悪臭コスト					
⑥その他公害防止コスト					
(1)-2 地球環境保全コスト	133,074		143%		
①地球温暖化防止及び省エネコスト	133,074		143%		断熱壁・防水、高効率照明・高COP型空調機器の設置、ペアガラス、全熱交換器の設置
(1)-3 資源循環コスト		21,738		75%	
①資源の効率的利用コスト					
②廃棄物処理・処分コスト		21,738		75%	産業廃棄物、廃液、廃試薬、RI廃棄物、可燃ごみ・落ち葉・厨芥ごみ等の処分、不燃物リサイクル
③PCB廃棄物処理コスト					
(2) 管理活動コスト	0	5,681		92%	
①環境マネジメントの整備・運用コスト		430		59%	環境マネジメント推進室諸経費
②環境報告の開示及び環境告知コスト		419		130%	環境報告書作成
③環境負荷監視コスト		3,954		101%	定期排水分析検査
④教職員及び学生への環境教育等コスト		878		73%	学生委員会環境活動支援、環境人材育成プログラム
⑤緑化・美化等の環境改善対策コスト					
(3) 社会活動コスト	0	0			
①事業所を除く緑化、美化等コスト					
(4) 環境損傷等コスト	0	403			
①損害賠償等コスト		403		103%	汚染負荷量割賦金
合計	133,074	96,578	143%	257%	

環境保全効果・ 環境保全対策に伴う経済効果



事業活動に投入した資源に関する環境保全効果における総エネルギー量は、前年度より増加となりました。事業から排出される環境負荷及び廃棄物に関する環境保全効果における一般廃棄物は、前年度比で11%増加しました。

環境保全対策に伴う経済効果では、全体で、前年度比0.5%の約313万円減少しました。

●環境保全効果

事業エリア内で生じる 環境保全効果の内容	環境保全効果を示す指標		
	指標の分類	2025年度	対前年度比
INPUT 事業活動に投入する資源に関する環境保全効果	総エネルギー投入量 (GJ)	163,602	102%
	電気 (千kWh)	12,755	102%
	都市ガス (千m ³)	709	108%
	液化石油ガス (kg)	2,704	103%
	A重油 (kℓ)	77	82%
	灯油 (kℓ)	54	100%
	ガソリン (kℓ)	31	103%
	軽油 (kℓ)	33	97%
	水道 (千m ³)	82	105%
	化学物質 (PRTR法対象化学物質) (t)	5	163%
	用紙A4版換算 (万枚)	636	85%
	トイレットペーパー (千ロール)	57	100%
	温室効果ガス	7,861	111%
OUTPUT 事業活動から排出する環境負荷及び廃棄物に関する環境保全効果	硫黄酸化物 (t)	0.22	58%
	一般廃棄物 (t)	153	101%
	産業廃棄物 (t)	147	85%
	PCB廃棄物 (t)	0	0%
	下水道 (千m ³)	82	105%
	実験廃液 (t)	15	100%
	BOD汚濁物質排出量 (推定値) (t)	18	120%

産業廃棄物 (t) = (経理課データ：産業廃棄物) + (経理課データ：特別管理産業廃棄物 (実験廃液を含む)) - (安全衛生管理室データ：実験廃液)

●環境保全対策に伴う経済効果

効果内容	2024年度支払額 (千円)	2025年度支払額 (千円)	対前年度増減額 (千円)	対前年度比
光熱水費の節減額	540,076	544,004	-3,928	100.7%
電気	380,350	381,688	-1,338	100.4%
ガス	92,893	95,494	-2,601	102.8%
水道	46,844	49,038	-2,194	104.7%
重油	12,790	10,659	2,131	83.3%
灯油	7,199	7,125	74	99.0%
廃棄物処分費の節減額	28,814	21,738	7,076	75.4%
廃液処分費の節減額	3,873	3,890	-17	100.4%
合計	572,763	569,632	3,131	99.5%

10. 環境に関する規制などの遵守状況及び環境リスクマネジメント

12 つくる責任
つかう責任



13 気候変動に
具体的な対策を



16 平和と公正を
すべての人に



岩手大学に関わる環境法規制（一部）

『岩手大学環境マネジメントマニュアル』に基づき、岩手大学で履行すべき環境関連法規制の改正状況を毎年5月と11月に確認し、岩手大学環境マネジメントシステム（EMS）内部監査実施時（毎年6月下旬～7月上旬）に、環境関連法規制の遵守状況を評価しています。

関連法規制名とその遵守の要点	評価対象部署	実行状況
フロン類の使用の合理化及び管理の適正化に関する法律 「外観目視による検査などの実施」	EMS内部監査対象ユニット	遵守確認 (2025年度 EMS 内部監査時 遵守確認)
国等による環境物品等の調達の推進等に関する法律 「環境物品などの選択」		
廃棄物の処理及び清掃に関する法律 「ゴミ分別の適正な実施」	人文社会科学部・理工学部・ 法人運営部・学務部・附属小学校・ 附属幼稚園・RI総合実験センター	
ポリ塩化ビフェニル（PCB）廃棄物の適正な処理の推進に関する 特別措置法「PCB廃棄物の保管・処理」	法人運営部経理課	
放射性同位元素等の規制に関する法律 「測定・記録・帳簿の作成・保管など」	RI総合実験センター	
毒物及び劇物取締法 「容器・被包・貯蔵（陳列）場所での表示」 「廃棄方法基準に従った廃棄の実施」	人文社会科学部・理工学部・ 附属小学校	一部部局においては 正処置

環境リスクマネジメント

3 すべての人に
健康と福祉を



6 安全な水とトイレ
を世界中に



12 つくる責任
つかう責任



14 海の豊かさを
守ろう



2025年度における岩手大学の環境リスク発現事象とその後の対応の概要については下記の通りです。

事象	対応内容と結果
構内排水水質分析結果 (採取年月日2025年7月28日)「BOD」と「ノルマル ヘキサン抽出物質含有量（動植物油脂類）」が農学部3 号館系統排水で下水排除基準値を上回った。 BOD：690mg/L (基準値：600mg/L未満) ノルマルヘキサン抽出物質含有量（動植物油脂類）： 43mg/L (基準値：30mg/L以下)	農学部・獣医学部へ「要改善点に係る記録書」を9月18日に送付し、 原因等の報告を依頼。原因として動物解剖実習時の動物の糞尿等が排 排水水質に影響を及ぼした可能性が考えられるものの特定には至らず、 12月17日、上記の部局・ユニット構成員に注意喚起の連絡を実施し たことが報告された。
構内排水水質分析結果 (採取年月日2025年11月13日)「浮遊物質量（SS）」 が農学部1号館系統排水で下水排除基準値を上回っ た。 浮遊物質量（SS）：1100mg/L (基準値：600mg/L未満)	農学部・獣医学部へ「要改善点に係る記録書」を12月15日に送付し、 原因等の報告を依頼。原因として節水型トイレの特性等により、放出 水体積当たりのトイレトーパーの紙繊維量がトイレ使用の混雑状 況により増加したものと考えられることから、特別な処置は行わず、 今後の経過を観察することとした。
構内排水水質分析結果 (採取年月日2026年3月2日)「BOD」が理工学部地区 系統排水で下水排除基準値を上回った。 BOD：630mg/L (基準値：600mg/L未満)	理工学部へ「要改善点に係る記録書」を3月26日に送付し、原因等 の報告を依頼。原因として節水型トイレの特性または利用時間帯の混 雑状況により、糞尿の希釈割合が下がったことでBOD値が瞬間的に 高くなったものと考えられることから、特別な処置は行わず、今後の 経過を観察することとした。

目的・目標

- 毒物・劇物の管理（自己点検及び管理状況調査の実施）（2025年度）
- ・ 目的 毒物と劇物の管理・取扱状況に関して、使用者自身による自己点検及び安全衛生管理室による調査を行うことで、適切な管理への意識を高める。
- ・ 目標 毒物と劇物の使用責任者が、毒物等取扱施設自己点検表を用いて自己点検を行う。
毒物等の管理・取扱状況を確認する立ち入り調査を実施する。

取組状況

- 毒物等取扱施設自己点検について
岩手大学毒物及び劇物管理規則に従い、127名の毒物等使用責任者が「毒物等取扱施設自己点検表」による自己点検を実施した。
全ての使用責任者から自己点検表の提出があり、問題ありと回答したのは3名だった。安全衛生管理室が改善内容（予定を含む）を確認した。
- 毒物等管理状況調査について
毒物294本を対象に立ち入り調査を行い、保有している毒物等の管理・取扱状況を確認した。

成果・資料他

- 2025年度 毒物等取扱施設自己点検結果一覧

	対象者数	提出者数	未提出者数	全て問題なし と報告した者	問題ありと 報告した者
人文社会科学部	1	1	0	1	0
教育学部（附属学校を含む）	10	10	0	10	0
理工学部	43	43	0	42	1
農学部（附属施設含む）	50	50	0	49	1
獣医学部（附属施設含む）	17	17	0	17	0
研究支援・産学連携センター	3	3	0	3	0
三陸水産研究センター	3	3	0	2	1
合計	127	127	0	124	3

- 2025年度 毒物等管理状況調査結果

毒物（294本）を保有する使用責任者（41名）の調査結果

調査 対象者	調査結果			調査項目
	問題なし	問題あり	問題がある内容	
41名	29名	12名	・ 保管庫に一般試薬が 混在している	・ 毒物の現品確認 ・ 受払簿の有無、記載内容の確認 ・ 毒劇物専用保管庫の確認 （施錠、表示、一般試薬の混在）

- 最終結果

1) 毒物等取扱施設自己点検

- ・ すべての毒物等使用責任者が、「毒物等取扱施設自己点検表」による自己点検を実施し、結果を毒物等管理委員会に報告した。

2) 毒物等管理状況調査

- ・ 毒物294本を対象に保有者（教職員41名）の管理・取扱状況を確認した。立ち入り調査において、一般試薬の混在があった箇所について、一部は改善予定であることを確認した。

11. 環境マネジメントシステムの見直し

代表者による全体の評価と見直し



令和8年（2026年）2月7日

岩手大学環境マネジメントシステム最高環境責任者

岩手大学長 小川 智

2025年度「環境マネジメントシステム見直しのための情報」では、6点の指摘がおこなわれた。

- ① 内部監査については、監査箇所の精選やオンライン導入等、負担軽減のための見直しをして以降、順調に新方式が定着しつつある。一方で、毒物・劇物の取り扱いに関し「重大な要改善点」が指摘されるなど、とすると管理の基本が忘れられがちではないかとの懸念がある。

①については、毒物・劇物の取り扱いについての研修やチェックのあり方を、安全衛生を見直すなど、管理の基本にたち戻る機会の醸成を指示する。
- ② 「2024年度環境目的・環境目標及び活動計画に基づく取組の達成状況」については、いずれの達成状況も「B」であり、未達ではないとはいえ、より意欲的な達成への挑戦も検討する必要がある。

②については、環境目的・環境目標及び活動計画に基づく取組の達成状況を年度途中でチェックし、目標に早期に到達している場合は、ネクストゴールの設定を検討するなど、より意欲的な達成への挑戦を喚起するしくみづくりを指示する。
- ③ 環境マネジメント学生委員会の活動は活発で、委員数も多く確保できているが、活動が前例踏襲となっていないか、学生自身が環境 이슈の移り変りに敏感となり、意欲的に新しい企画をたてていくことが期待される。学生たちの自主性を尊重しつつ、適切な補佐・助言をする役割が、環境マネジメント推進室にますます求められており、今年度より開催を再開した「環境セミナー」などの枠組みを上手に使用して、研鑽の機会を増やしていく必要がある。

③については、学生の環境 이슈に対する学びを深め、意欲的に新しい企画をたてていくことができるよう、「環境セミナー」などの枠組みを用いて、適切な補佐・助言を学生に対しおこなうよう指示する。
- ④ 環境報告書については、2025年版ではイラストや写真の多用、レイアウトの工夫などをおこなったが、今後もたゆまぬ改善の必要がある。充実の方向にある『統合報告書』との差異化も含め、より読みやすく親しみやすい紙面づくりにいそしんでいくとともに、サステナビリティ開示としてのわかりやすさ・データの豊富さについて、今後検討の要がある。

④については、今後も他大学の環境報告書を研究し、サステナビリティ開示としてのわかりやすさ・データの豊富さを追求するよう、また『統合報告書』との差異化について、戦略企画室と意見交換をはじめよう指示する。

⑤ 環境省「自然共生サイト」への登録作業は、今年度各所への問い合わせに着手したというものの、熊の出没騒ぎなどで中断状態となっている。今後状況をみつつ、関連同好会の観察会活動などにより得られる動植物観察リストを収集し、最終的な登録へと歩を進める必要がある。

⑤については、関連同好会の観察会活動などにより得られる動植物観察リストの収集を進め、環境省「自然共生サイト」への最終的な登録をめざすよう指示する。

⑥ 「国立大学法人岩手大学がその事務及び事業に関し温室効果ガスの排出の削減等のため実行すべき措置について定める計画」については、今後達成状況をどのような間隔で把握し、着実な実現につなげていくかを検討する必要がある。内部監査自体はつつがなく実施できているが、活動計画が形骸化・マンネリ化している印象があり、毎年の活動計画の精査・熟考が必要である。

⑥については、「国立大学法人岩手大学がその事務及び事業に関し温室効果ガスの排出の削減等のため実行すべき措置について定める計画」の達成状況をどのような間隔で把握し、着実な実現につなげていくかの検討を始めるよう指示する。また、内部監査の結果がより活発な活動計画の策定につながるよう、活動計画の策定のプロセスを見直すよう指示する。

以上。



12. 環境報告書第三者意見

ステークホルダーによる環境報告書の評価



岩手大学人文社会科学部環境科学課程（現：地域政策課程）卒業生
岩手大学環境マネジメント学生委員会OG
株式会社テレビ岩手 プロジェクト事業推進部 駒井 晴夏

■ 自己紹介

2018年に岩手大学を卒業しました、駒井晴夏と申します。在学中は岩手大学環境マネジメント学生委員会副委員長を務め、当時は環境報告書の執筆にも関わりました。現在も学生委員会の活動が継続していることをうれしく思うとともに、今回、卒業後に再びこのようなご縁をいただけたことを光栄に感じております。

現在は、地元のテレビ局で自治体関連事業やプロポーザル案件の企画・推進業務を担当しています。昨年度は岩手県事業「脱炭素化広報事業実施業務」を受託し、「いわてカーボンフリー・アクション (ICFA)」とともに、幅広い世代に行動変容を促す広報に取り組みました。岩手大学の学生とも一緒に活動する機会があり、学生時代に取組んだ環境分野で、今度は社会人として後輩たちと活動できたことを大変意義深く感じています。

■ 環境報告書の評価と今後期待する点

今回、環境報告書を拝読してまず印象に残ったのは、昨年度から構成を変更し、より身近な取り組みの紹介から始めることで、環境問題に関心のある人だけでなく、幅広い読者に手に取ってもらいやすい工夫がされていることです。各教員へのインタビューや、学生委員会・学内カンパニーの活動報告などからは、文系・理系の枠を越えて環境問題を多角的に学び、実践できる、自然豊かな岩手大学ならではの特色も伝わってきます。

全体的にグラフや写真も多く、視覚的にも分かりやすい報告書になっていると感じました。また、昨年度の第三者意見を受けて内容がブラッシュアップされている点からも、外部からの意見を柔軟に取り入れながら、より良い報告書を目指していることが伝わります。毎年の取り組みを積み重ねるだけでなく、過去の報告を超えてより良いものへ更新していく姿勢に感銘を受

けました。

一方、テレビ局で「伝える」仕事に携わる立場から、さらに分かりやすく、説得力のある発信にするために、二点期待したいことがあります。

一つ目は、取り組みの「見える化」です。「環境配慮の取り組みに関する目標及び計画の達成状況」について、「達成」「未達成」という結果だけでなく、実際の取り組みの様子を写真などで示すことで、活動の実態がより伝わるのではないのでしょうか。せっかく素晴らしい取り組みを行っているからこそ、「何をしたのか」を視覚的に伝えることも重要だと考えます。

二つ目は、目標と実績のさらなる明確化です。温室効果ガス等の排出量について、昨年度の第三者意見を受けて目標年度や現状の数値を明記した点は、非常に良い取り組みだと評価いたします。他の項目についても、目標値と実績値を並べ、経年変化をグラフや表で示すことで、取り組みの進捗をより客観的に理解できるようになると思います。評価基準や数値目標の算出根拠についても、可能な範囲で示すことで、報告書としての信頼性がさらに高まるのではないのでしょうか。

■ おわりに

アーバンベアの出現など、岩手県内の自然環境も変化しています。こうした身近な変化をきっかけに、地球温暖化を自分ごととして捉える必要性は年々高まっています。地道な活動を続け、その輪を広げていくことが重要です。岩手大学には、環境に配慮したキャンパスづくりだけでなく、地域課題の解決を担う「人」を育てる力があります。これからも学生の目線と行動力を生かし、地域とともに環境課題に向き合う大学であり続けることを期待しています。



ICFAキックオフミーティング



ICFA対象「デカボ勉強会」

『環境報告書2025』 第三者意見への対応

岩手大学『環境報告書2025』「ステークホルダーによる環境報告書の評価」として、岩手大学卒業生であり、岩手県庁で地球温暖化対策・脱炭素推進の環境政策に従事されている阿部円香様に第三者意見を執筆いただきました。

岩手大学在学中には、人文社会科学部環境科学課程（現：地域政策課程）で学びながら、2008年10月から17年間、岩手大学の環境マネジメントシステム（EMS）運営に学生の立場から参画している「岩手大学環境マネジメント学生委員会」（EMSC）のメンバーとして活動されました。環境省の支援後、環境マネジメント推進室で運営している環境人材育成プログラムの学内認定資格「岩手大学環境管理実務士」も在学中に授与されました（2013年度）。



「岩手大学環境管理実務士」
授与式の様子

岩手大学『環境報告書2025』第三者意見で、阿部様は、全体を通してグラフや写真が多く、環境目標及び活動計画の達成状況がイラストで示されていることから一見して分かりやすい報告書であること、学内外の事例を広く紹介していることから読み手への配慮が感じられたことを挙げられました。

また、『環境報告書2024』第三者意見を受け、『環境報告書2025』で新たに「環境関連分野に取り組む卒業生の活躍紹介」が加わっていることに着目され、学外からの意見を踏まえ、PDCAサイクルに則り、即改善に移していくEMS運営における誠実な姿勢を評価いただきました。

一方、岩手大学『環境報告書』に数値的な目標を設けている項目の達成率とその評価の提示をご提案いただきました。目標達成までのロードマップが組み立てやすくなり、未達成の場合の改善案も具体的な手法を検討できることによる提案です。

また、岩手大学の環境活動・EMS運営の形骸化・マンネリ化の指摘に着目されました。阿部様が3年間担当されていた岩手県内大学の横軸連携組織「いわてカーボンフリー・アクション（ICFA）」に、阿部様も岩手大学在学中所属されていたEMSCも参画していることを例に挙げ、このような学生主体の新たな取組が、貴学の課題解決に一石を投じ、また本報告書など様々な媒体で広く学内外に発信されることへの期待を示されました。

前者については、「環境負荷低減への取組」において、総エネルギー投入量や水資源投入量、総物質投入量、温室効果ガスの排出量、総排水量の一部について前年度比を記載していますが、達成率は提示しておりませんでした。温室効果ガスの排出量については、今号より「岩手大学ビジョン2030」に基づいた中期計画を踏まえ、現状を示しました。その他については達成率の掲載を検討いたします。

後者については、阿部様のご指摘の通り、本学の環境活動およびEMS運営開始から約20年が経過し、形骸化やマンネリ化が見られることは否めません。EMS推進室およびEMSCと連携し、特に学生主体による新たな取り組みを検討してまいります。

サステナビリティ・レポート・アワード(SRA) 審査講評

[岩手大学「環境報告書 2025」](#)



総 評

岩手大学の「環境報告書 2025」は、学内環境マネジメントの取り組みやSDGsへの貢献を、図表やイラストを用いて分かりやすく整理した報告書となっています。環境目標や活動計画の達成状況がマークやリンクで示されており、視覚的に理解しやすく、学生や教員の声も掲載されていることで、読者に身近に感じられる工夫がされています。また、附属学校との環境教育活動や地域との連携など、大学ならではの独自性が見える点も評価できます。

誠実性・透明性の面では、目標達成状況や環境負荷低減の取り組みが明示されており、第三者評価も行われている点は高く評価できます。ただし、一部の評価基準や数値の根拠が明確でない箇所があり、これを補足するとより説得力のある報告書になります。また、文章量や表が多く、ページごとの情報密度が高いため、もう少しデザイン面で工夫すると、より多くの読者に読みやすく伝わるでしょう。

総じて、岩手大学の学内外での環境活動や独自の制度が丁寧に紹介されており、環境報告書として十分にまとまった内容です。今後は、大学ならではの特色をさらに強調し、評価基準や数値の根拠を明示することで、より説得力・独自性の高い報告書へと発展させることができると考えられます。

各審査団体からの評価項目に基づいたコメント（要約）

※参加団体；京都大学環境サークルえこみっと / 千葉大学環境ISO学生委員会 /
大阪公立大学環境マネジメント推進室 / 岐阜大学環境サークルG-amet

評価項目	総合的な評価（要約）
わかりやすさ	図・グラフやSDGs表示、マーク等により全体として視覚的に分かりやすい構成となっている。ただし、専門用語の説明が不足しており、ページによっては文章中心でデザイン面に工夫の余地がある。
誠実性・透明性	目標達成状況やデータ、前年比、第三者評価などが明記されており全体的に高評価。一方で、一部で評価根拠の不明確さや課題・反省の記述不足が指摘された。
興味・関心	インタビュー、学生・附属学校・事業者の取り組み紹介などにより関心を引く内容となっている。環境活動の広がりが評価される一方、デザインや研究紹介の強化でさらに向上の余地がある。
テーマ性・独自性	地域連携、附属学校での活動、独自資格制度など岩手大学独自の取り組みが評価されたが、一部では独自性がやや弱いとの指摘もあり、さらなる特徴強化が期待される。
未来志向	中長期ビジョンや目標設定が明確で全体的に評価は高い。ただし、より具体的な数値目標やビジョンの明確化を求める意見があった。
総合評価	環境報告書としての完成度・信頼性は高く、データや制度面も充実している。今後はデザインの改善や独自性・ストーリー性の強化により、より魅力的な報告書になるだろう。

※「サステナビリティレポート・アワード」とは、学生が大学生の視点で評価する、サステナビリティ報告書の新たな表彰制度（2025年度からスタート）

13. 本年度活動計画

2026年度岩手大学環境目標及び活動計画



環境方針等 (EA21要求事項)	環境目標	活動計画
Ⅰ. キャンパス環境の改善	分かり易い環境マネジメントシステムの運用を図る。	1.引き続き新体制での内部監査を実施する。
	上田キャンパス内に生物多様性の保存地域を設定する。	1.引き続き自然共生サイトへの登録を検討する。
Ⅱ. エネルギーの使用 (二酸化炭素排出量の削減)	2030年のCO ₂ 排出量を2013年度比で50%削減目標を構成員全体への周知を図る。	1.実行計画 ¹⁾ を周知する。
	LED設置率を2025年度から2ポイント上げる。	1.LEDへの更新を図る。
	PPA方式による太陽光発電施設の設置について検討する。	1.オンサイトPPA方式による太陽光発電施設設置のための基本情報を収集する。
	調達電力の再生可能エネルギー割合を検討する。	1.調達電力に占める再エネ電力比率の設定に向けた検討を行う。
	環境取組チェックリストを積極的に活用する。	1.引き続き環境取組チェックリストの取り組み内容を精査する。
Ⅲ. グリーン購入	グリーン購入実績のデータをもとに、コピー用紙、コピー機使用量及び印刷外注の軽減を図る。	1.各部局のコピー用紙、コピー機の使用量及び印刷外注の件数や印刷数量等の現状を把握し、DX化を踏まえた軽減策を検討する。
Ⅳ. 廃棄物等の排出 (廃棄物排出量の削減)	リサイクルの推進に向けた取組みを行う。	1.リサイクルの技法をポスターで呼びかけたり、SNSで発信したりすることで、学内の分別意識向上を図る。
Ⅴ. 環境教育 環境人材教育 (環境に関する教育(環境人材の育成))	構成員に対し環境課題に関する情報発信を行う。	1.EMS学生委員会の関心を踏まえ、再生可能エネルギーの社会的受容をテーマとした環境セミナーを開催する。
	効果的な環境人材育成履修モデルを図る。	1.地域協創教育センター「イーハトーヴ協創コース」環境人材育成履修モデルにおける関連選択科目を開講し、地域協創マイレージ正課外活動対象プログラムを実施する。
	学部生への効果的な環境教育を実施する。	1.「岩手大学環境マネジメントシステム(EMS)2026年度教育研修計画書」に掲載されている学部生を対象とした環境教育研修を実施する。
	附属幼稚園では、花や野菜の栽培等を通して、植物が育つ環境について関心をもつ活動を行う。	1.花の栽培や野菜作りで水やりや草取りなどの世話をする。それらを通して、自然の美しさ、豊かさ、不思議さなどに気づいたり、成長する様子に関心をもったり、命の大切さを感じたり、収穫の喜びを味わったりする。
	附属小学校では、「総合的な学習の時間」等を活用し、自然観察や地球温暖化の学習など環境について学ぶ場を創る。また、委員会やたてわり活動を通して、環境に配慮した活動を行う。	1.各教科の学習において、身の回りや地球規模の環境問題について理解を深め、自分にできることを主体的に考え、表現する活動を推進する。 2.委員会活動等を通して、通年での校庭の石拾いをはじめ、夏季の草むしり、秋季の落ち葉はき、冬季の除雪作業など、季節に応じた環境整備活動に継続的に取り組む。

1) 岩手大学がその事務及び事業に関し温室効果ガスの排出の削減等のため実行すべき措置について定める計画

13. 本年度活動計画

環境方針等 (EA21要求事項)	環境目標	活動計画
V. 環境教育 環境人材教育 (環境に関する教育（環境人材の育成）)	附属中学校では、環境を守りはぐくむ心と感受性を育て、環境美化活動、エネルギーの節約等に配慮した生活・行動を実践できるよう指導する。	1. 生徒会活動による校地及びその周辺の清掃・環境美化活動を行う。 2. ボランティア委員会による附属幼稚園等の清掃・環境美化活動を行う。
	附属特別支援学校では、作業学習等で使用する原材料のリサイクル化を推し進めるとともに、委員会活動や生徒会活動における資源回収を通して環境活動を実施する。	1. 空き缶、古新聞等の「資源回収」を全校に呼びかけると共に、回収状況を掲示し、より一層のリサイクル意識の形成を図る。 2. ペットボトルキャップの汚損状況に応じた仕分けを行い、より効率的に洗浄活動を行う。また、回収業者へキャップを持ち込む活動も継続して実施する。
	EMS学生委員会では環境活動を積極的に実施する。	1. これまでの環境活動を精査し、PDCAサイクルに基づき継続する活動についての改善を図る。 2. 教職員が学生委員会の活動に積極的に参画し活動内容を共有する。
VI. 環境関連研究 (研究及び地域や社会への還元)	環境関連研究の見える化を図る。	1. 引き続き、段階的情報発信整備に向け、発信情報の受け手を想定し、試験的に環境関連研究の情報を発信し効果を検証する。
	各学部・研究科の特色を活かした環境関連研究を推進する。	1. 人文社会科学部としての総合科学的な環境関連研究を推進する。
		2. 学校現場などの教育実践への活用や地域ニーズに応える環境関連研究を推進する。
		3. ソフトパス理工学の理念に基づき、ソフトパス理工学総合研究センター及び学部・研究科における持続可能な社会づくりに向けた理工学分野の環境関連研究を推進する。 4. 農学部と獣医学部は農林漁業並びに畜産業の発展に資する環境関連研究を推進する。
VII. 構内事業者の取組	放送大学岩手学習センターにおいて環境に配慮した取組を実施する。	1. 放送大学学生に環境保全活動の啓発を推進する。
	プラスチックごみの削減に努める。	1. 学食BENTOリ・リパック容器の研究室、ゼミでの集団回収を実施する。
	食品残渣のリサイクルを検討する。	2. 調理加工済みの食品残渣リサイクルに向けた方法を引き続き検討する。
VIII. 地域社会に対する取組 (社会貢献)	持続可能な漁業に向けた取組みを行う。	1. 地域でのイベント等で機会があれば、本キャンパスでの研究や調査などで得られた知見を活かし、講演や発表、展示等を行う。
	環境活動結果の効果的な情報発信	1. 環境活動結果の効果的な情報発信方法について他大学の環境報告書を研究する。 2. サステナビリティ開示としてのわかりやすさ・データの豊富さと『統合報告書』との差異化について戦略企画室と意見交換を行う。
	環境報告書の信頼性の向上を図る。	1. 環境報告書の信頼性の向上を図る方法について他大学の環境報告書を研究する。
IX. 法規制順守	法規制に関わる製品の購入・使用・廃棄時には法規制遵守評価シートによる確認を行う。	1. ボイラー、フロン類使用製品の購入・使用・廃棄時には法規制遵守評価シートによる確認を行う。

環境報告ガイドライン項目と本報告書対象項目

環境報告ガイドライン(2018年版)における項目		掲載頁
第1章 環境報告の基礎情報		
1. 環境報告の基本的要件		
(1) 報告対象組織		表紙裏面
(2) 報告対象期間		表紙裏面
(3) 基準・ガイドライン等		表紙裏面 42
(4) 環境報告の全体像		表紙裏面
2. 主な実績評価指標の推移		
(1) 主な実績評価指標の推移		24～34
第2章 環境報告の記載事項		
1. 経営責任者のコミットメント		
(1) 重要な環境課題への対応に関する経営責任者のコミットメント		1
2. ガバナンス		
(1) 事業者のガバナンス体制		20～21
(2) 重要な環境課題の管理責任者		
(3) 重要な環境課題の管理における取締役会及び業務執行組織の役割		
3. ステークホルダーエンゲージメントの状況		
(1) ステークホルダーへの対応方針		2～4
(2) 実施したステークホルダーエンゲージメントの概要		11～19 37～38
4. リスクマネジメント		
(1) リスクの特定、評価及び対応方法		33
(2) 上記の方法の全社的なリスクマネジメントにおける位置付け		
5. ビジネスモデル		
(1) 事業者のビジネスモデル		1 5～10 20
6. バリューチェーンマネジメント		
(1) バリューチェーンの概要		－
(2) グリーン調達の方針、目標・実績		27
(3) 環境配慮製品・サービスの状況		－
7. 長期ビジョン		
(1) 長期ビジョン		20～24 25
(2) 長期ビジョンの設定期間		
(3) その期間を選択した理由		
8. 戦略		
(1) 持続可能な社会の実現に向けた事業者の事業戦略		1 5～16
9. 重要な環境課題の特定方法		
(1) 事業者が重要な環境課題を特定した際の手順		20
(2) 特定した重要な環境課題のリスト		
(3) 特定した環境課題を重要であると判断した理由		
(4) 重要な環境のバウンダリー		
10. 事業者の重要な環境課題		
(1) 取組方針・行動計画		20
(2) 実績評価指標による取組目標と取組実績		21～22 40
(3) 実績評価指標の算定方法		
(4) 実績評価指標の集計範囲		

環境報告ガイドライン(2018年版)における項目		掲載頁
(5) リスク・機会による財務的影響が大きい場合は、それらの影響額と算定方法		－
(6) 報告事項に独立した第三者による保証が付与されている場合は、その保証報告書		－
参考資料 (主な環境課題とその実績評価指標)		
1. 気候変動		
(1) 温室効果ガス排出		24～27
1) スコープ1 排出量		
2) スコープ2 排出量		
3) スコープ3 排出量		
(2) 原単位		25 30
1) 温室効果ガス排出原単位		
(3) エネルギー使用		24～27
1) エネルギー使用量の内訳及び総エネルギー使用量		
2) 総エネルギー使用量に占める再生可能エネルギー使用量の割合		
2. 水資源		
(1) 水資源投入量		25 33
(2) 水資源投入量の原単位		
(3) 排水量		
(4) 事業所やサプライチェーンが水ストレスの高い地域に存在する場合は、その水ストレスの状況		－
3. 生物多様性		
(1) 事業活動が生物多様性に及ぼす影響		－
(2) 事業活動が生物多様性に依存する状況と程度		－
(3) 生物多様性の保全に資する事業活動	28	
(4) 外部ステークホルダーとの協働の状況	14 18	
4. 資源循環		
(1) 資源の投入		26 29
1) 再生不能資源投入量		
2) 再生可能資源投入量		
3) 循環利用材の量		
4) 循環利用率（＝循環利用材の量/資源投入量）		
(2) 資源の廃棄		26 30
1) 廃棄物等の総排出量		
2) 廃棄物等の最終処分量		
5. 化学物質		
(1) 化学物質の貯蔵量		26
(2) 化学物質の排出量		
(3) 化学物質の移動量		
(4) 化学物質の取扱量（製造量・使用量）		
6. 汚染予防		
(1) 法令遵守の状況	33	
(2) 大気汚染規制項目の排出濃度、大気汚染物質排出量	26 30	
(3) 排水規制項目の排出濃度、水質汚濁負荷量	27 33	
(4) 土壌汚染の状況		

今年度の環境報告書は、表紙の残雪の岩手山と桜が象徴する「ありのままのキャンパス」を切り取り、私たちの「実感を伴う活動」のいまを伝えるべく編纂しました。本書は、全13章を通じて本学の多角的な環境マネジメントを俯瞰できる構成となっています。

前半の第1章・第2章では、「サステナブルキャンパス賞2025」奨励賞の受賞に始まり、環境科目責任教員・寺崎正紀先生へのインタビューでも語られたオムニバス科目「環境A」などの特色ある環境教育や、附属学校での活動を一望できるようにまとめました。続く第3章から第5章では、環境マネジメント学生委員会（EMSC）の活動、さんさ踊りの太鼓の桶制作に挑む学内カンパニー、行政で活躍する卒業生の紹介など、地域と強固な共創の輪を広げる人々の姿を描いています。生協でのリ・リパック容器や割り箸の回収など、構内事業者との地道な共同歩調も記録されています。

しかし、私たちの活動は華々しい成果だけではありません。第9章・第10章に開示されたデータは、コピー用紙などの資源削減の成果を伝える一方、滝沢演習林学生宿舍の空調整備や新牛舎の稼働等に伴うエネルギー消費量と二酸化炭素排出量の一時的増加という「現実」も示しています。また、排水における一時的な基準値超過や、毒物・劇物管理での一般試薬混在など、日々生じるリスクに誠実に向き合い、是正措置や「こまめなCheckと地道なAct」を重ねるプロセスを包み隠さず開示しました。

こうしたデータは、第11章に掲載した最高環境責任者・本学学長の全体の評価と見直しにある「活動計画の形骸化・マンネリ化防止へのPDCA改革」を促すための確かな土台です。最後に、第12章の第三者意見や、新たに始まった「サステナビリティ・レポート・アワード（SRA）」での客観的な評価や温かい課題提起を受け止め、それらを「2026年度活動計画」へと力強くつなげました。

本報告書は、本学が一体となって持続可能な未来へ踏み出す「主体的で積極的な価値創造ストーリー」そのものです。今後とも温かいご理解とご支援、そして改善に向けた忌憚のないご助言を賜りますようお願い申し上げます。



環境マネジメント推進室 室長
木崎 景一郎

この報告書は、ホームページにて公表しています。

岩手大学環境マネジメント推進室HP「資料集」

<https://ems.iwate-u.ac.jp/data/>

発行日 2026年9月

次回の発行は、2026年4月～2027年3月を対象期間として
2027年9月ごろの発行を予定しています。

〒020-8550 岩手県盛岡市上田3丁目18番8号
岩手大学環境マネジメント推進室
Tel 019-621-6911・6912
Fax 019-621-6999
E-mail ems@iwate-u.ac.jp

環境報告書 2026

